

Title	生計戦略としてのセトウルメント・パターン：レンネル島における集落の変化
Sub Title	Settlement pattern as a subsistence strategy : changes of the village sites on the Rennelle Island
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1985
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.54, No.2/3 (1985. 3) ,p.1(115)- 40(154)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19850300-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

生計戦略としてのセトウルメント・パターン

—レンネル島における集落の変化—

近森正

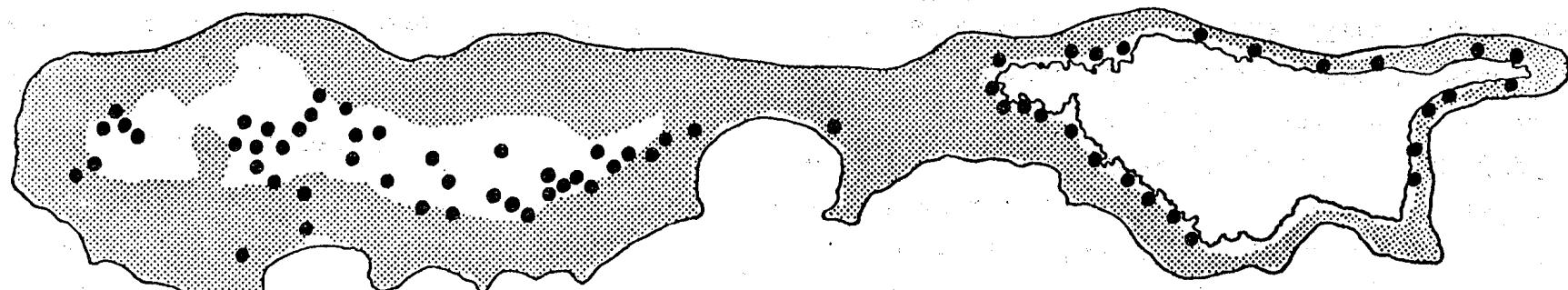
- I ニウパニ村事件
- II 一九三八年以前の集落
- III 分散した集落
- IV 土と水
- V 資源利用の空間パターン
- VI キリスト教による集落の統合
- VII 新しい生活
- VIII 生存のための対応
- IX トタン屋根
- Xまとめ

I ニウパニ村事件

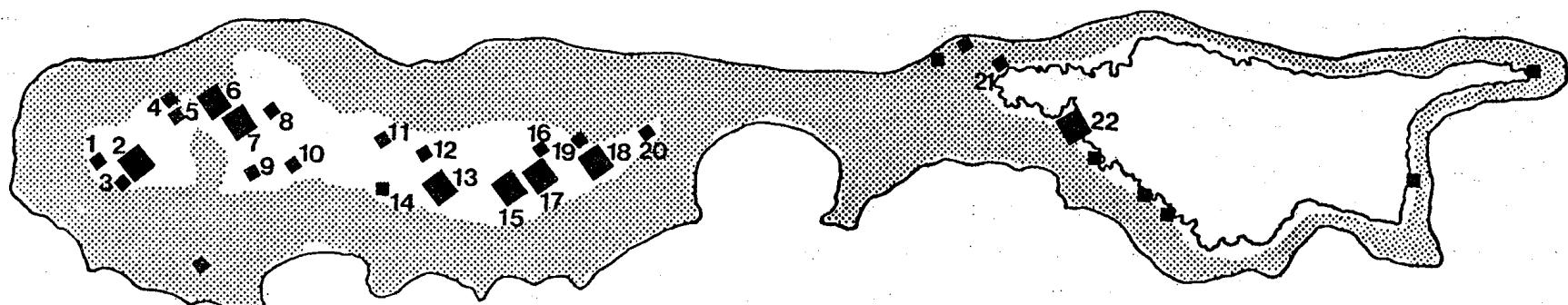
——今から四十年前の満月の晩。ニウパニ村でヤムイモの収穫祭 (ngapu) の儀礼がはじまろうとした時だった。儀礼の司祭者テゲタは彼の義父にあたる最高首長タウポンギに向って、いきなり「まぬけなタウポンギ！」とののしり、つづいて「明日は皆そろって天国へ行こう。」と人々に呼びかけたのだ。翌朝、人々はテゲタに命ぜられるままに、天国へ出かけるための食料を用意して、村で一番大きな家に集まつた。天国に着けば、白人の神キリストが、われわれに木綿の布地を渡してくださるということだった。その家は大勢の人の重みで床が傾くほどだった。

「いよいよ天国へ出発する。ふり落されないよう、しっかりと柱につかまれ！」家中に入りきれないものには、泣きわめくものさえいた。人々をつめ込んだ家は、いつこうに空中へ舞い上る。とはしながらも、みなひたすらに祈りをささげた。そうしているうちに昂奮は高まり、人々は貴重な器財に火を放ちはじめた。村の家屋は破壊され、椰子の木は切り倒された。テゲタは神に人肉を捧げるのだといって、インド痘の病人をつぎつぎに棒で

fig. 1 レンネル島における集落の変化



a 1938年以前の居住地 (マナハ)



b 1938年以前の祭祀場 (ガクエンガ)

祭祀場 (ガグエンガの名称)

1. Magaegigi

2. Magama'ubea

3. Teatumatangi

4. Mataaso

5. Magaesinu

6. Gotomagae

7. Magaetonu

8. Magae

9. Teagangi

10. Magaetapu

11. Tanakinuku

12. Gotomugaba

13. Magaebabae

14. Magaeta

15. Magaetoha

16. Pa'agentegaki

17. Gotokanaba

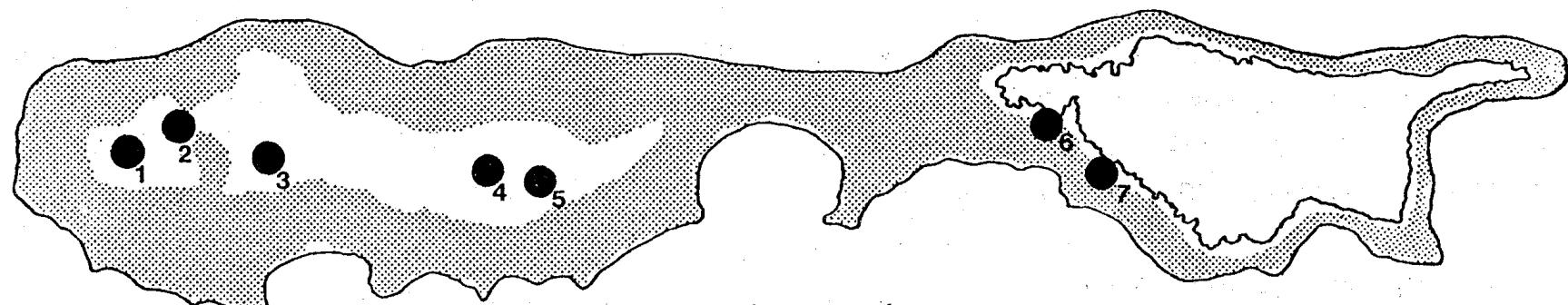
18. Magaesinu

19. Nukugangi

20. Mata'aso

21. —

22. Magama'ubea



c キリスト教導入時期（1938年）における集落の統合

1938年キリスト教導入時期における集落

- 1. Kaagua
- 2. Taugganggoto

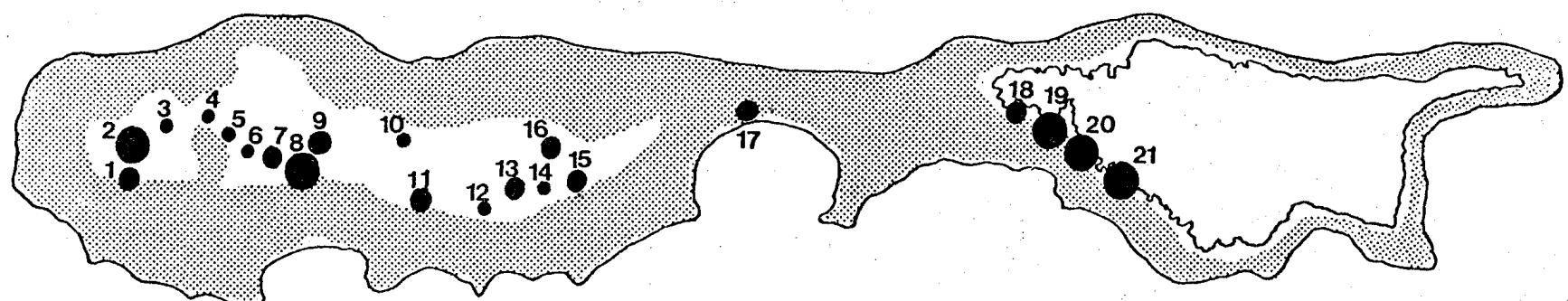
3. Hatangua

4. Teabamagu

5. Te-Mugginuku

6. Niupani

7. Tegano



d 現在の集落（1975年）

現在の集落

- 1. Segena
- 2. Kaagua
- 3. Tepongima
- 4. Nukuposa'a

- 5. Matahenua
- 6. Magae
- 7. Tigoa
- 8. Hatagua
- 9. Ngongona

- 10. Hutimogu
- 11. Tahanuku
- 12. Kanaba
- 13. Teabamagu
- 14. Tahua

- 15. Matangi
- 16. Baitupu
- 17. Lavanggu
- 18. Tebaitahe
- 19. Niupani

0 10 20 km

現在の集落と人口 (1975)

		M	F	Total
1	Segena	5	5	10
2	Kaagua	44	54	98
3	Tepongima	13	5	18
4	Nukuposa'a	1	1	2
5	Matahenua	16	10	26
6	Magae	3	7	10
7	Tigoa	33	30	63
8	Hatagua	52	41	93
9	Ngongona	29	40	69
10	Hutimogu	10	11	21
11	Tahanuku	41	31	72
12	Kanaba	15	11	26
13	Teabamagu	24	32	56
14	Tahua	7	4	11
15	Matangi	23	18	41
16	Baitupu	23	20	43
17	Lavanggu	40	21	61
	不明	3	2	5
	West	382	343	725
18	Tebaitahe	24	22	46
19	Niupani	62	54	116
20	Tegano	34	47	81
21	Hutuna	69	75	144
	不 明 (Tekoko) (非レンネル島民)	1 (4)	2 (3)	3 (7)
	East	190(194)	200(203)	390(397)
	Total	572(576)	543(546)	1115(1122)

こゝた島民の心理的葛藤の象徴であった。この事件はただちに島の西部や隣のベロナ島に伝達され、創始祖先カイトゥがもたらしたという二つの石を破壊することによって、ポリネシア人としては最も遅くキリスト教を受け入れることになったのである。それは一九一〇年にレンネル島に上陸を試みた三人の宣教師がカンガヴァ湾で殺害されてから二八年も後のことであった。

これによつてもたらされた社会的変化がいかに大きなものであつたかはいうまでもない。島内の各所に散在していた家屋敷は教会を中心とするいくつかの集落に統合された。景観的にあらわれたその変化は、それが新しい社会の到来を人々に強く印象づけることになった。南太平洋エヴァンジェリカル・ミッショント教会派 (South Sea Evangelical Mission, S.S.E.M.) はリ

ウパニ村とカングア村に、セガノス・ティ・アムンティイスト・ミッショント教会派 (Seventh Day Adventist Mission, S.D.A.) はフトウナ村にそれぞれ教会を建設した。こゝしてキリスト教を受け入れる以前に、少くとも七三は数えられた集落 (fig. 1-a) にあるキリスト教学校 (One pusu school) に送られて、教育をうけてはいたが、ニウペニの事件は、文明との接觸によつてお

打ち殺した。

一九三八年一〇月、血しぶを散らした集團狂氣 (マス・ヒステリア) の混乱のなかで、レンネルの人々はキリスト教を受け入れた。これに先立つ四年前には、すでに六人の若者がマライタ島にあるキリスト教学校 (One pusu school) に送られて、教育をうけてはいたが、ニウペニの事件は、文明との接觸によつてお

II 一九三八年以前の集落

キリスト教を受け入れる以前の集落は、今日、ひとつも残ってはない。家屋は破壊され、屋敷の多くはブッシュの中に埋れてしまった。伝統的な宗教体系の一部を構成していた、かつてのセット・ウルメント・パターーンはキリスト教によって完全に否定されたからである。四十年前の集落は、いまとなつては老人の記憶、それについての断片的な記録のほかに、考古学的調査によつてしか知ることができない。私達が考古学的調査をおこなつたマタンギ、バイガウ、トウフヌイの三つの集落址と、収集した断片的情報によつて、かつての集落を再構成してみよう。(fig. 2-a, 2-b) 家屋敷の平面プランは植樹された椰子の木によつて羽子板状に区画されている。(pl. 1) その形態は、彼らの祖先が二十数世代もの昔、はるか東方の海のかなたから渡来したという伝承が語るカヌーの櫂を象徴しているといふ。道路あるいは海岸に面して、アガ・シガ (angasiga) と呼ばれる細い通路があり、これが羽子板であることは櫂の柄にあたる。長さ一五メートルから四五メートルほどあるその通路をたどつて奥に進むと、通路の両側、あるいは片側に墳墓 (takotonga) が配されている。それらは一辺五〇八メートル位の方形プランをもち、平らなサンゴの板石で周囲を囲み、二段あるいは三段に積み上げられている。上方は海岸の白砂で覆われ、一番上に住居と同じ形式の小さな祠が建てられたといふ。墓はほとんどが男性の祖先を埋葬したもので、ヤトルメント・パターーンを構成するその位置は、儀礼上の重要性を物語る。

生計戦略としてのセット・ウルメント・パターーン

墳墓のある位置から奥に入ると空間がひろがり、コトマガエ (ngotomagae) と呼ばれる小広場になる。こゝは神の供物が積み上げられ、収穫物を分配し、儀礼・舞踊がおこなわれる神聖な空間である。女性はそこに足を踏み入れることができなかつたといふ。最奥には低い基壇 (atinga) が設けられていて、その上に住居 (hange) が建てられた。

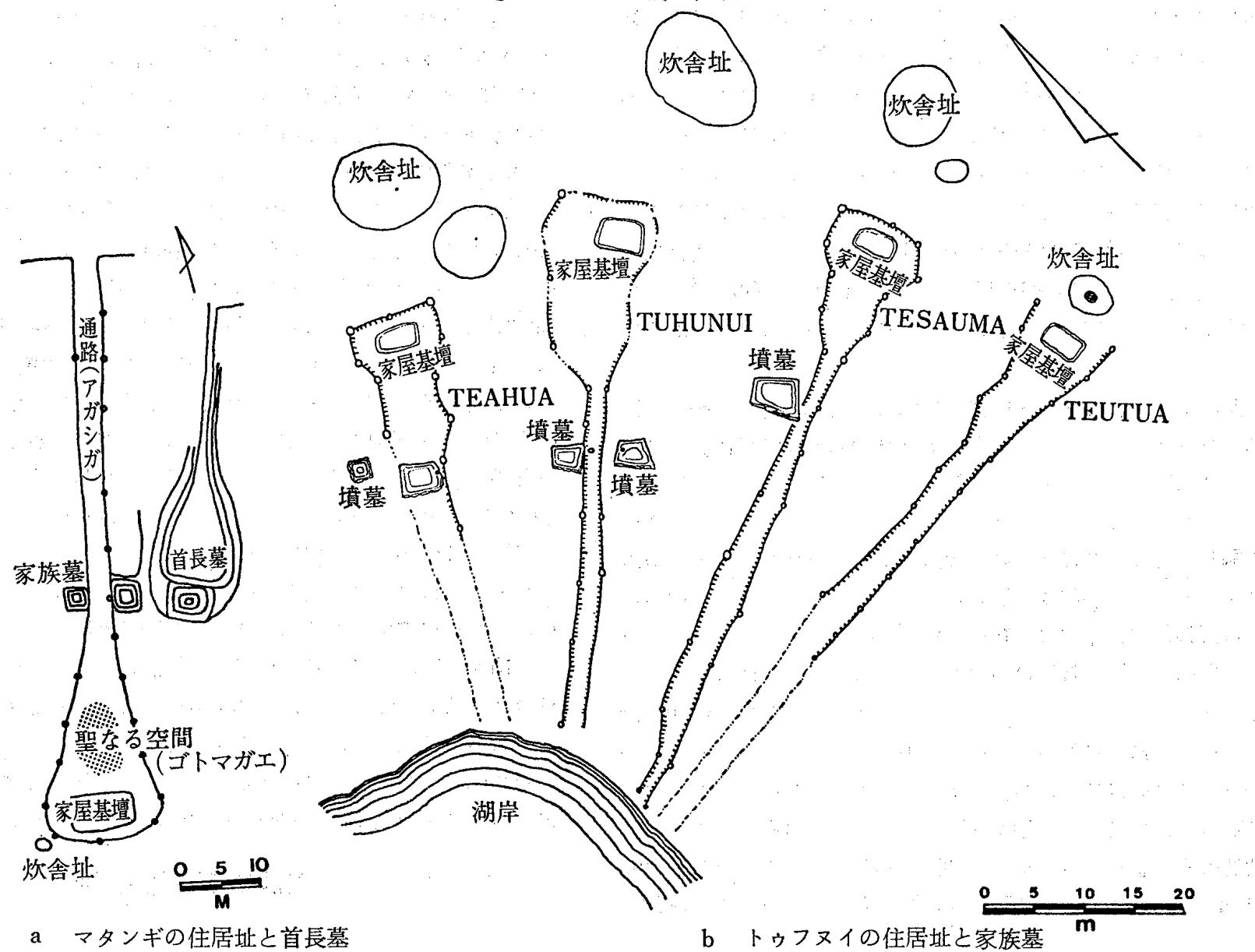
住居の構造については、残存するものがないから、正確に知ることはむずかしい。I. Hogbin (1931) の記録によれば次のようである。椰子の葉で葺いた切妻屋根が、地面から一フィート位の高さにまでぶきおろされる。側壁はなく入口もない。人は腰をかがめて屋内に入る。屋根裏には柵がはられ、沢山のサメの尾が捕獲したトロフィーとして、吊されていたという。また、S. Lambert (1931, p. 142) は最も大きな住居は間口六・七・六日、奥行三・六・四・六日、棟木の長さは約三・三・六日であると記してゐる。

弯曲した垂木は宗教的な施設にしか用ひられないと I. Hogbin (1931, p. 176) は書いているが、P. Buck (1972) の著書に収録されたビショップ博物館所蔵の写真によれば、首長の家屋の内部にそれがみられ、破風にはペンドナスの葉で編んだ壁が設けられている。首長の家屋 (hange hakahua) の内部は人が立つて歩けるほど大きかったといふ。住居においても階層の分化に応じた形式の違いがあつたことがわかる。(fig. 3-a, b)

住居の後方、屋敷の外側には、炊舎 (paito) があり、ハイウム (haiumu) と呼ばれる石蒸焼のための料理石 (クッキング・

fig. 2 1938年以前の住居址

大 (110)



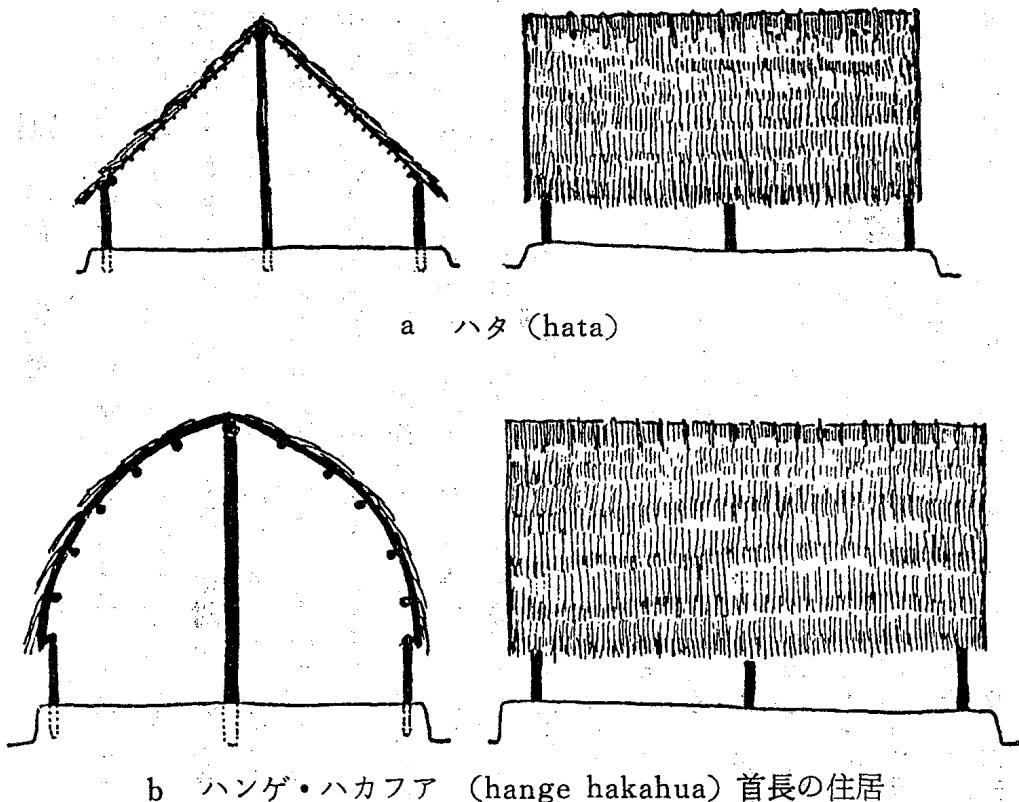


fig. 3. 1938年以前の住居

ストン）が堆積している。男性が炊舎に入ることはタブーであり、そこは女性だけの空間であった。すべての食物はこゝでととのえられ、居住棟に火をもち込むことは許されなかつた。今日でも炊舎の周囲にはバナナが植えられるが、その葉は石蒸焼のために食物を包むのに用いられる。バナナの他には日常の生活で嗜好品として欠くことができないベテル・ヤシもその周辺に植えられる。

さて、このように特徴的な屋敷の形は何を表現しているのだろう。レンネル島民の伝統的な宇宙観によると、東南の天空の一角にヌクアヘト（nukuaheia）という最高神テハインガアトウア（tehainga a'tua）のすまじいがつて、そこが、やはり羽子板の形をしているといふ。そうすると伝統的な屋敷のプランは、天上の世界を表現した地上のミクロ・コスムではないかとも考えられるのである。人々は儀礼をおこなつて天空の神から、ヌクアヘアにあるヤムイモやタロイモ、トビウオやサメなどあらゆる富を送りとどけてもらひうのだといふ。また住居の基壇の下には、実際には見えないが大きな穴があいているといふ。そこにつけられた梯子をおりていくとポウンギ（poungi）といふ地下の世界に通じるのである。住居が精神的宇宙の一環を占めていることがうかがわれるのである。

私達が調査をおこなつたマタンギとバイガウでは、このような屋敷が一基だけ独立していたが、テンガノ湖に面したトウフヌイでは四基が並列して発見された。一九一〇年代にこの島を訪れた N. Deck (1921, p.475) によれば、当時最も大きな集落である屋

敷は八基しかなかつたという。

III 分散した集落

このように住居と広場、墳墓、炊舎、通路などによつて構成される屋敷地をレンネルの人々はマナハ (manaha) と呼ぶ。それは畠地 (u'manga) や休閑地 (ma'a'ngā) に対して居住空間をさす概念である。しかし、マナハは同時に、そこに居住する人々の社会単位でもある。父系、夫方居住によつて規制される夫婦と子供からなる拡大家族も意味するのである。ところで、レンネルに住むすべての人々は、父系の系譜をたどつて二十三あるいは二十四世代の昔、はるか東方の海の彼方から渡来したといふカイトウ (Kaitu'u) にさかのばる。つまり、すべての島民はカイトウを創始祖先とするひとつのかなバ (Sa'a Kaitu'u) に属している。したがつて、ひとつひとつのマナハは、カイトウが最初につくつたマナハから、長い間にわたつて系譜を分岐した結果、出来上つた父系出自の最小の社会単位なのである。

カイトウは、現在ニウペニ村の一角を占めるバイガウ (Baigau) に最初のマナハを置いた。カイトウ氏族はここを中心として、次第に島全体に領域をひろげ、四つのカカイアンガ (kakaianga) と呼ばれる小氏族を形成した。湖地方のテンガノ (Tengano) カカイアンガ、カンガヴァ (Lughu) カカイアンガ、島の中部地方のムギヘヌア (Mugihenua) カカイアンガがそれらである。(fig. 4)

こうした系譜集団の分岐は、また共同体の宗教センターとして建設されたガグエンガ (ngaguenga) の拡散ともよく対応している。ガグエンガは、東ポリネシアのマラエ (maraé) と同様な性格をもつ祭祀場である。カカイアンガやリネージ (hanohano) が分岐するにともなつて、ガグエンガも分離、拡散を重ねてきた結果、それぞれの社会集団は、互に順位関係のあるガグエンガをもつことになつた。(瀬良一九七九) (fig. 1-b) 伝承はレンネルにおいて最初に建設されたガグエンガは、テンガノ湖南岸にあるマガマウベア (Magama'ubea) であるとした伝承、系譜は島内のすべてのガグエンガが、ここから分離したことと跡づけてい

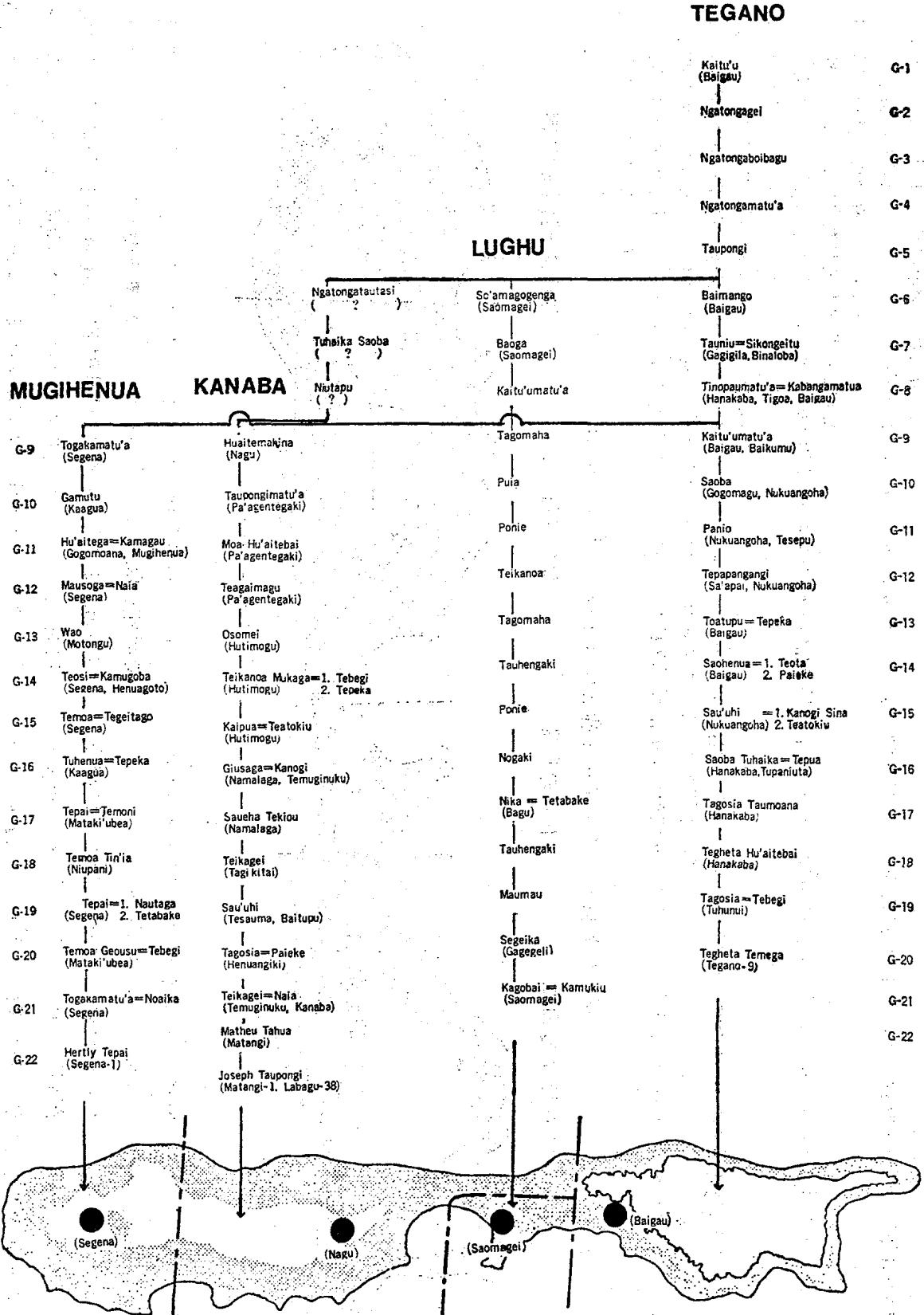
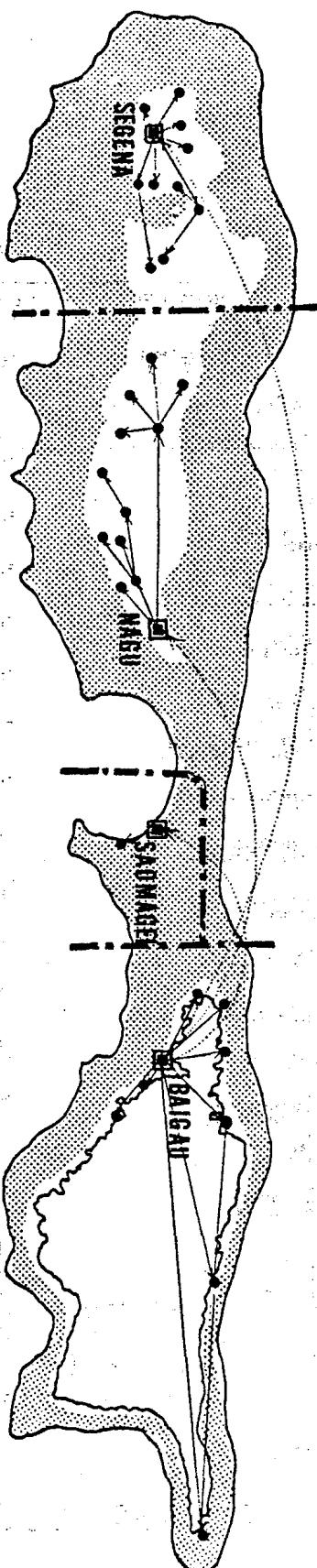


fig. 4 4つのカカイアンガの形成・系譜と領域
(地図上の黒丸はハカノホンガを示す)

(3) (私達の考古学的調査は、マガマウベアがわへなへとゆぐかへ大因〇年前には建設されたことを明ひかにした。640±115y B.P. 620 ± 110 y B.P.—Magama'ubea Loc. I., N-3961) へしたマナハの分離拡散のペロヤベア、キリスト教の散播期が據へ。やがてハーフタムの伝説が、やわめてダマト

シクな過程であった。拡散の中心から、次第に遠方へ分岐していく場合もあるが、かなりましも距離とは関係せずに、いくつかの山間的な集落を階層化しながら広がっていく場合もみられる。こうして一九三八年までに島内に分散したマナハの分布は、やがて特徴的である。図でわかるように、すべては島の内陸盆地、



MUGIHENUA KANABA

LUGHU

TEGANO

fig.5. 集落 (マハナ) の分散とカカイアンガ領域の形成

- (1) テンガノ湖周辺のマナハ
Baigauを中心として、九世姓首長 Kaitu'u matu'a の子孫が、湖周辺の Nakumagoiho, Tesepu, Temainge, Gakepa, Boua, Tupanota, Tuhunui, Teaba, Tehakagaba, Hanakaba, Tesauma, Tangibaka などに拡散した。
- (2) Baigau から西側内陸部に進出したマナハ八世代 Tinopai matu'a 以降, Baigau から Mugibai, Lughu, Temagabai, Kupougu, Nukusautia, Niteni, Segena, Teaba などに進出した。
- (3) Lughu のマナハ
六世代から十九世代まで、現在の Labanggu と Kangava の間に位置する Saomangei に中心のマナハがあつたが、住民の一部は Labanggu に移住して、この地域は無住になっている。
- (4) Segena から拡散したマナハ
九世代 Togakamatu'a から Segena はマナハをおいてから、ことを中心として十六世代目から Teatubai, Magalea, Taupi, Patonu, Saa'pai の五系統に分岐し、放射状に拡散した。

標高100m等高線以内に限定されており、しかも島軸線に沿って分散している。(fig.1-a) このような空間的拡散を決めた要因は何であったか。

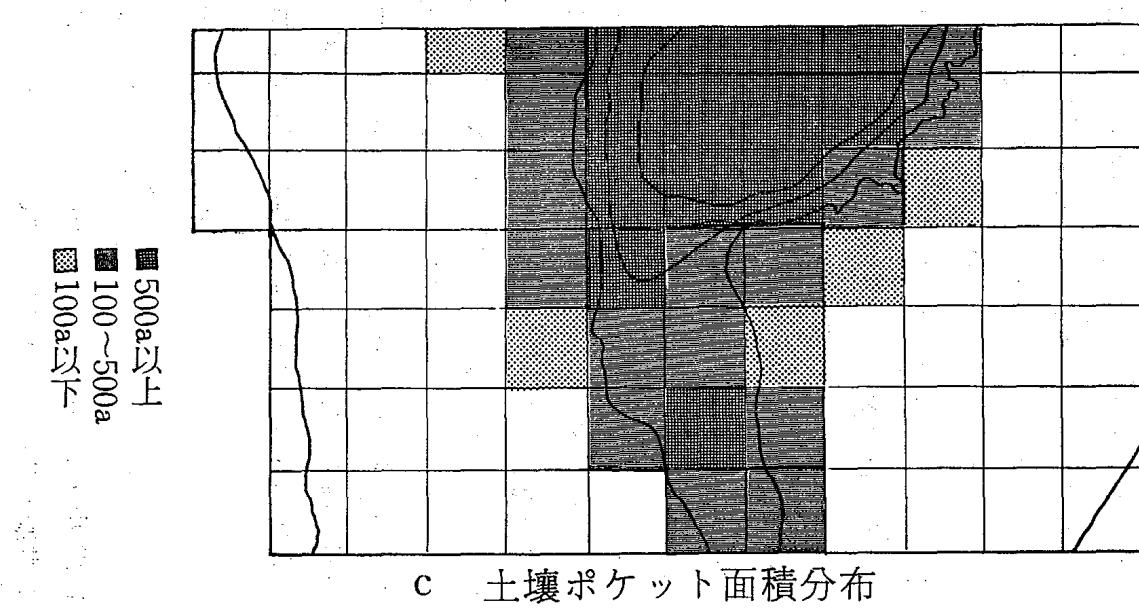
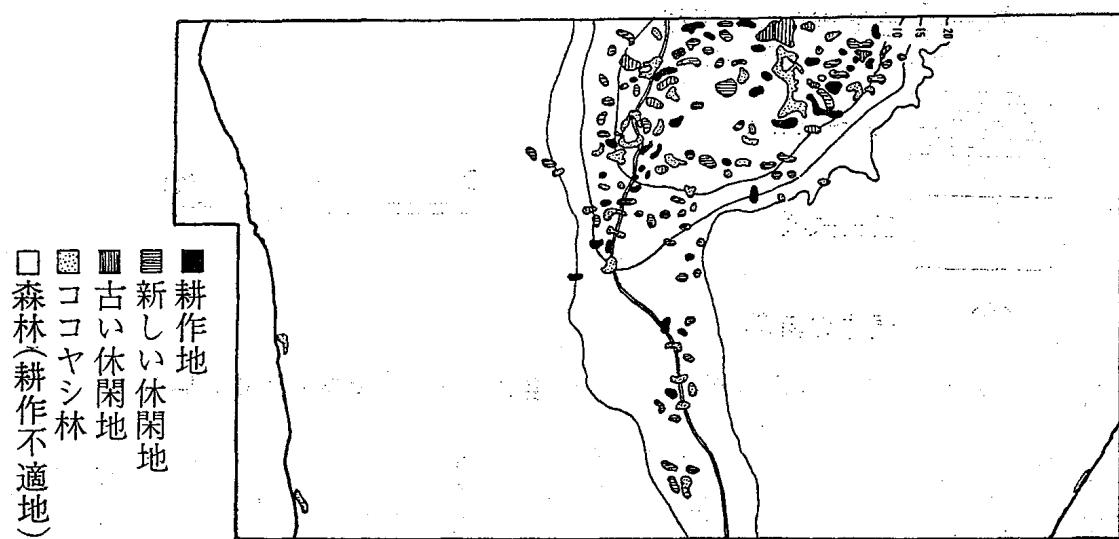
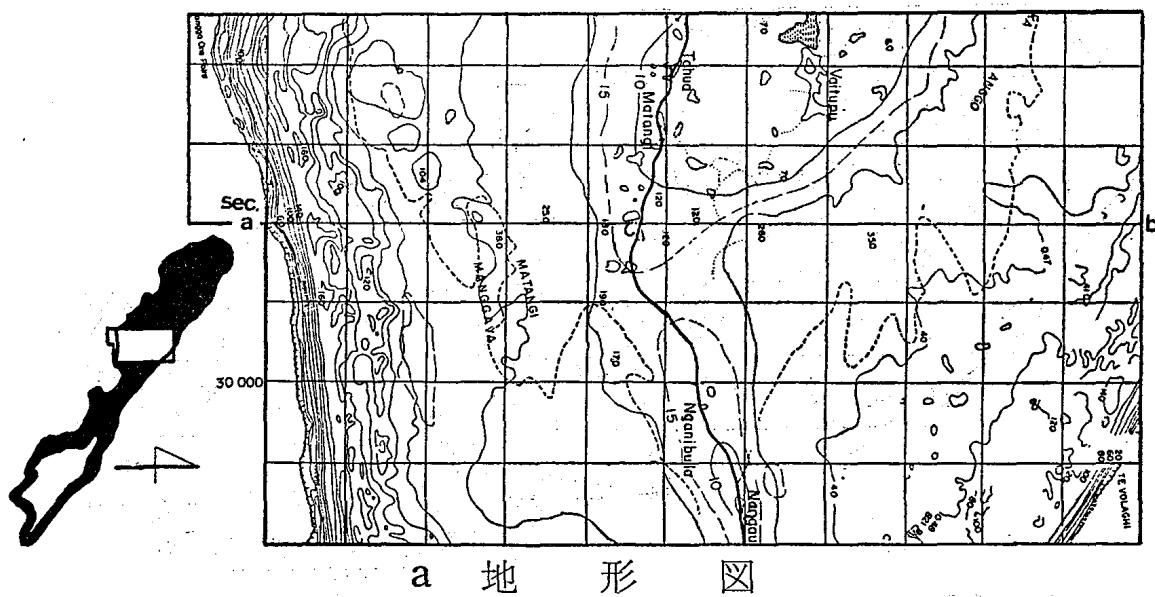
IV 土と水

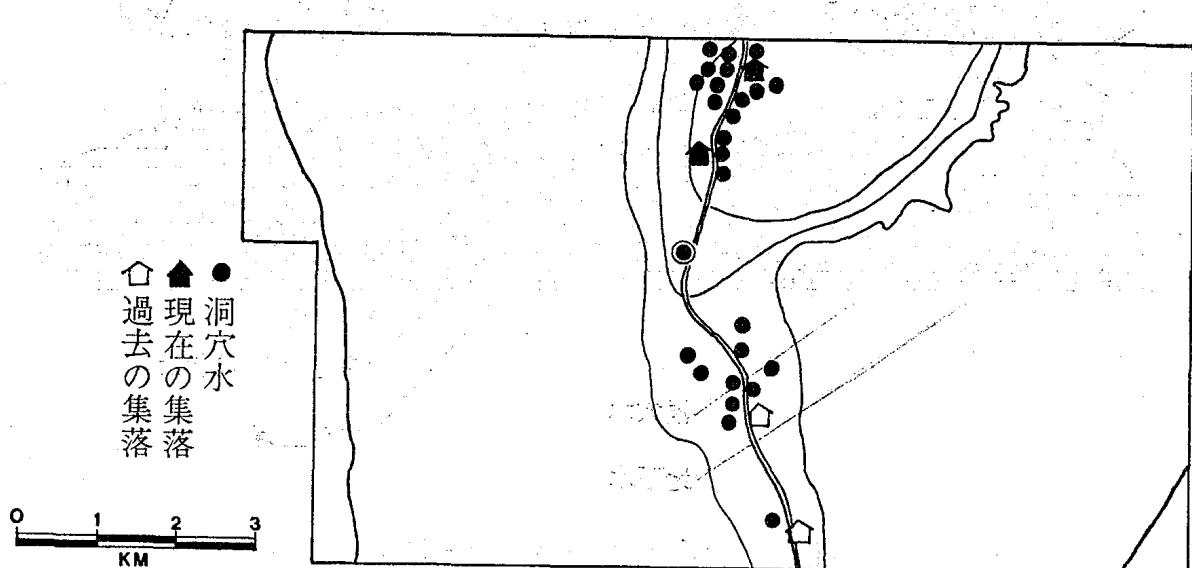
レンネル島は典型的な隆起環礁である。長さ八五km、幅一〇kmの長橢円をしたこの島は硬い造礁石灰岩でできている。標高一五〇～二〇〇mの丘陵が島の周囲をとりまき、内陸部は盆地状の低地になっている。おそらく、鮮新世の終りか、洪積世の初めに、環礁が隆起して、かつての内湖がこの盆地になつたのであろう。内陸盆地の地表は平坦ではなく、起伏をもつカルスト地形が、大小さまざまの窪地をつくり出している。サンゴ礁は土壤に乏しい。島民が農地として利用できる土壤は、もっぱら、この窪地に堆積している。土質は赤褐色ないし、黄褐色のテラロッサ型土壤を主体とし、表層部に薄い腐蝕土をのせている。このような石灰岩の窪地に、いわばポケット状に堆積した土壤は、島軸線にそつ内陸盆地の低部に集中的に分布している。土壤の生成が何故このような局地的な地形と関係しているのかについて、地質学的に充分な説明はまだ得られない。土壤の主体を構成するテラロッサ型土壤は、島が隆起した時の物理、化学的变化と石灰岩の溶解によって生じたのではないかと考えられている。fig.6およびfig.7-cは集落の分布と土壤量との

現在の集落

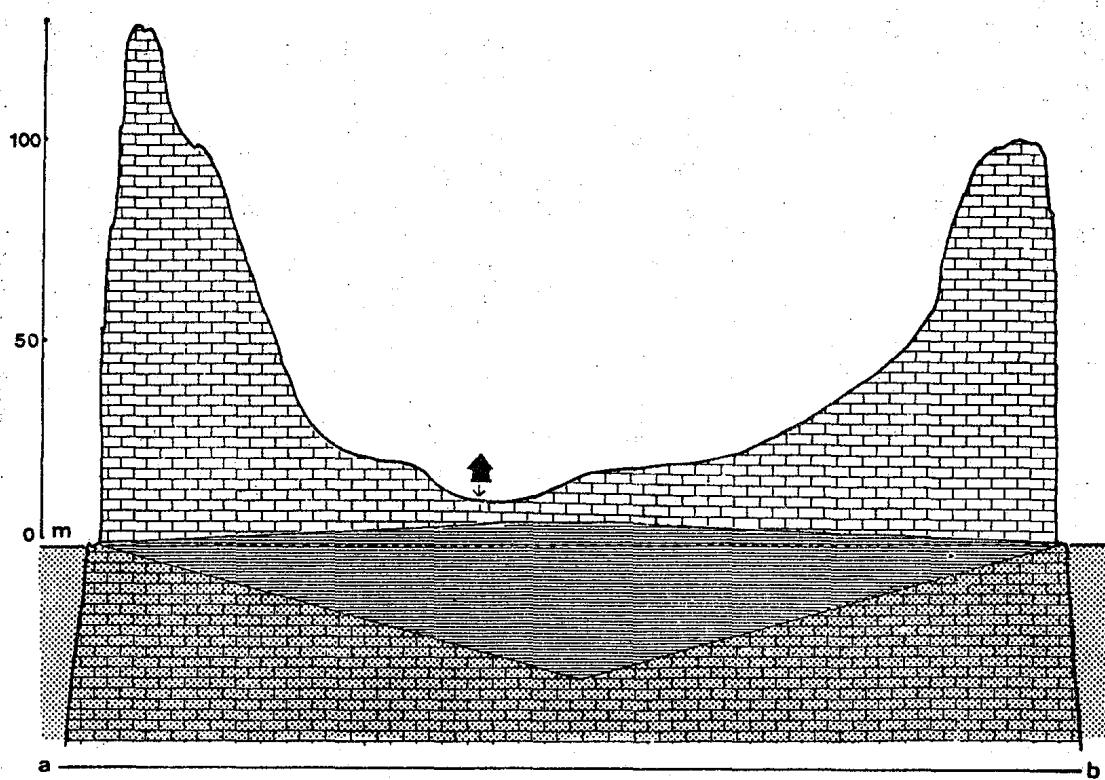
fig.6 レンネル島西部における土壤ポケットの面積と集落の関係

fig. 7. レンネル島マタンギ地区





d 洞穴水と集落の分布



e 地形断面模式図 (Sec. a-b)

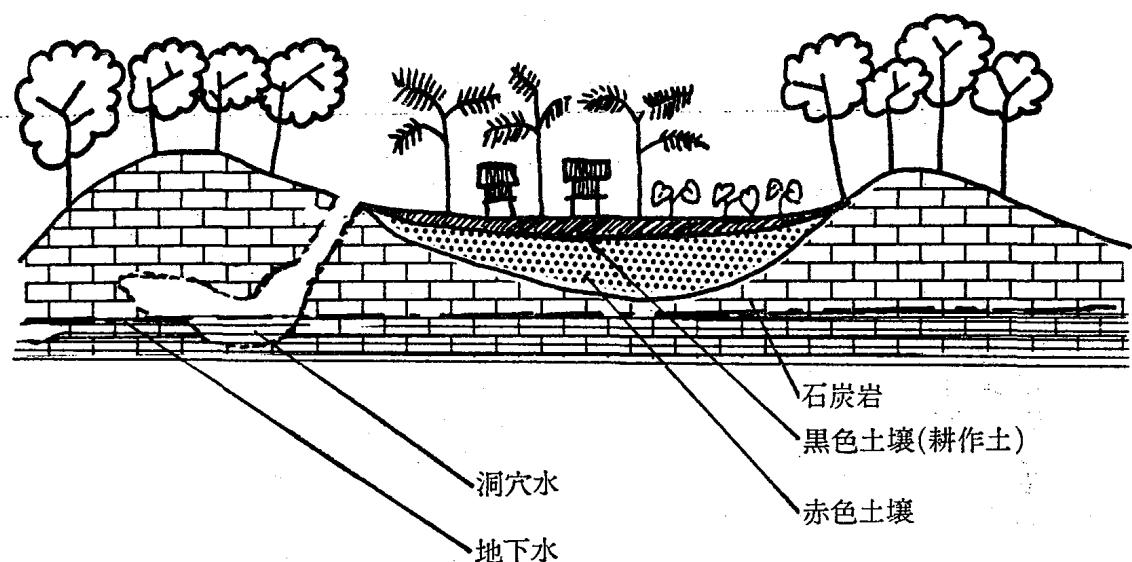


関係を示したものである。これをみると集落の立地が、現在、過去ともに土壤ポケットの耕作地に依存していることがわかる。

島軸線にそう低地は、また、地下水の利用にとっても限られた立地を提供している。レンネル島には年間三、〇〇〇mm以上の降雨量があるが、多孔質なカルスト状石灰岩は降雨を急速に地下に吸収してしまう。そのため、島には河川はなく、地表水はきわめて乏しい。(テンガノ湖は数%の塩分を含んだ鹹水湖である。)生活水として利用できるのは、唯一、ドリーネの洞穴から得られる地下水なのである。

集落内外の数十米の範囲には、かならず、その洞穴水をみつけることができる。たとえば、西部地区のゴンゴナ(Ngongona)村では、道路から部落に入る標高六m四〇の地点に、比高一・五mの深さに水面をもつ地下洞穴があり(pl.2)マタンギ(Matangi)村では、標高五m前後の集落地に接する石灰岩の露出部に水池をもつ洞穴がある(fig.7-d)。ふくに井戸施設を設けることはないが、人々はここで水浴をし、女達は洗濯をする。地下水は石灰岩の中に水体があるためにカルシウム分を多く含み、pHが高いが、島民には欠くことができない資源のひとつである。彼らがティノヘヌア(Tinohenua)と呼ぶ内陸盆地の中心、ことに標高一〇m未満の低地部に洞穴水の分布が多く、島民はこのあたりに水を得やすいことをよく承知している。そこは地表の標高が低いばかりでなく地下水のレベルそれ自体が高くなっているからである。

テマイゲ(Temainge)ヒタングイ(Matangi)の間にある洞穴において観測された地下水位の記録によると(fig.8)(国際協力事業団による)地下水位が周期的な変動をしめすばかりでなく、興味深いことに、その水位変動は、同じ期間内の海面の潮位変動と幾分のずれをもちらながら対応している。一九七五年一二月一二日から一七日にかけての自記水位計の記録は水位変動の振幅が一二月一一日あるいは一二日に最少になり、その前後に大きくなる傾向を示めしているが、カンガヴァ湾で得られた同期間の潮汐も同様に、一二月一二日に最少の振幅をつくり、その前後に大きくなっている。



f 土壤ポケットの概念図

る。地下水と潮汐の水位変動パターンにみられるこのような対応は、地下水が海水と別個の水体なのではなく、両者が連続していることを物語るのである。

多孔質で透水性の良い石灰岩からなるこの島は、あたかも洗面器の中に浮いたスポンジのように、海水を島の地下深部にまで浸透させている。しかし、その海面は島の中心部に近くなるほど幾分下降しているだろう。一方、島に降り注いだ雨水は、地下に浸透して淡水の地下水となる。塩水と淡水は密度の違いから、ただちに融合することがなく、ちょうど水に浮く氷の塊りのように、海水の上に淡水を乗せるかたちになっている。しかし、淡水の地下水は島の両側の海岸線に向って流出するから、淡水の地下水体は島の中央に高く、海岸線に向って低くなる。つまり凸レンズの断面の形のようだ。島の中央部において最も厚く、水位が高くなるのである。(Fig. 7-e)

もちろん、その形状は常に一定ではなく、降雨のあととか、季節的な降水量の変化、あるいは海岸線からの距離などの諸条件によって影響をうけるだろう。もし旱魃が続けば、淡水の水体が薄くなつて洞穴水に塩分があがってくる。地下水は洞穴から取水されるだけではなく、毛細管現象によって土壤ポケット内に水分を与えているから、そうした旱魃の場合には植生にも影響を与える、農耕活動に深刻な打撃を与えるだろう。

以上みてきたように、集落の立地が島の中央部、島軸線に沿う低い個所を選定しているのは、可耕地である土壤ポケットと、地下水をたたえた洞穴の分布、およびそれらの利用に規制されたも

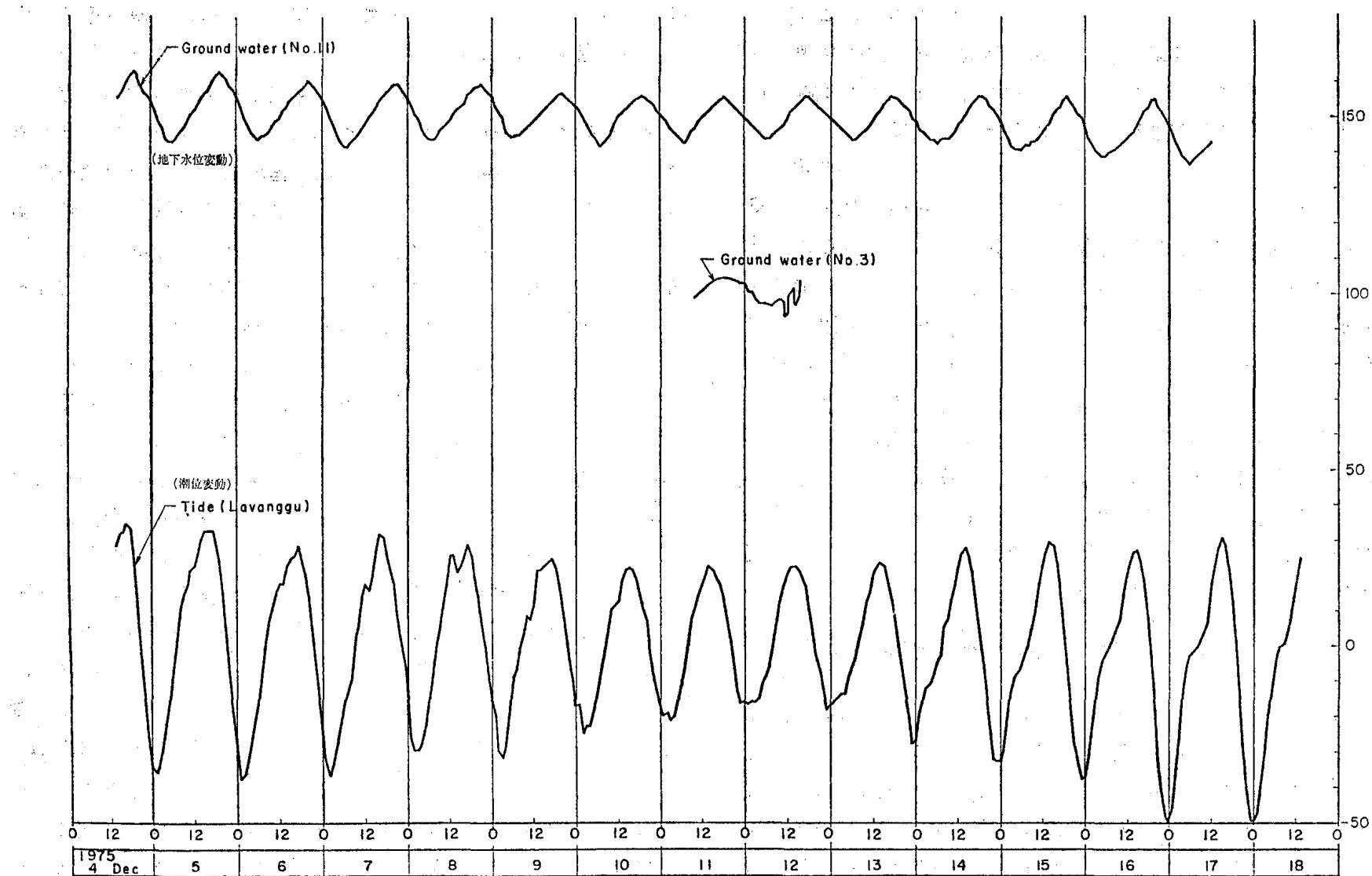
のと考える人が多いのである。ナガウ(Nangau)からテマイゲ(Temaiage)、マタンギ(Matangi)をくじ、タヒト(Tahua)にいたる道路沿いの洞穴水の分布をみると、(fig. 7-d) その数と集落人口との関係は明瞭であり、洞穴水のみられない個所には、過去、現在ともに集落が発達したことではない。

V 資源利用の空間パターン

すでに述べたカカイアンガ(kakaianga 小氏族)の占める空間領域に注目しよう。(fig. 4) 四つのカカイアンガは、それぞれ島軸線と直交して、帯状に島を分割している。このように北岸から南岸へ横断する細長い土地の分割は、カカイアンガだけではなく、それを構成するリネージ(ハノハノ hanohano) のレベルにおいても、一貫して見られる原理である。(fig. 9)

何故このような領域の区分が生じたのだろうか。ひとつは典型的な区劃をとりあげてみると、そこには住民にとって必要なすべての資源のゾーンがふくまれていて、気がつくだね。漁撈のための外洋域(tai)、礁前面(tai eha)、リーハ(lunga)、海産物を採集あるいは収集するためのリーフ・フラット(ngoto)、カヌーを繫留し、漁撈基地となる海岸(abatai, one)、建築材や利用植物を供給する森林(mouku)、野生食用植物や燃料を供給する休閑地(ma'a'anga)あるいは二次林(ngaoa'nga)、パンダナスの生育する叢地(maalu)

fig. 8. 地下水位と潮位の変動 (国際協力事業団)



(7) ロロヤシ林 (kiu)

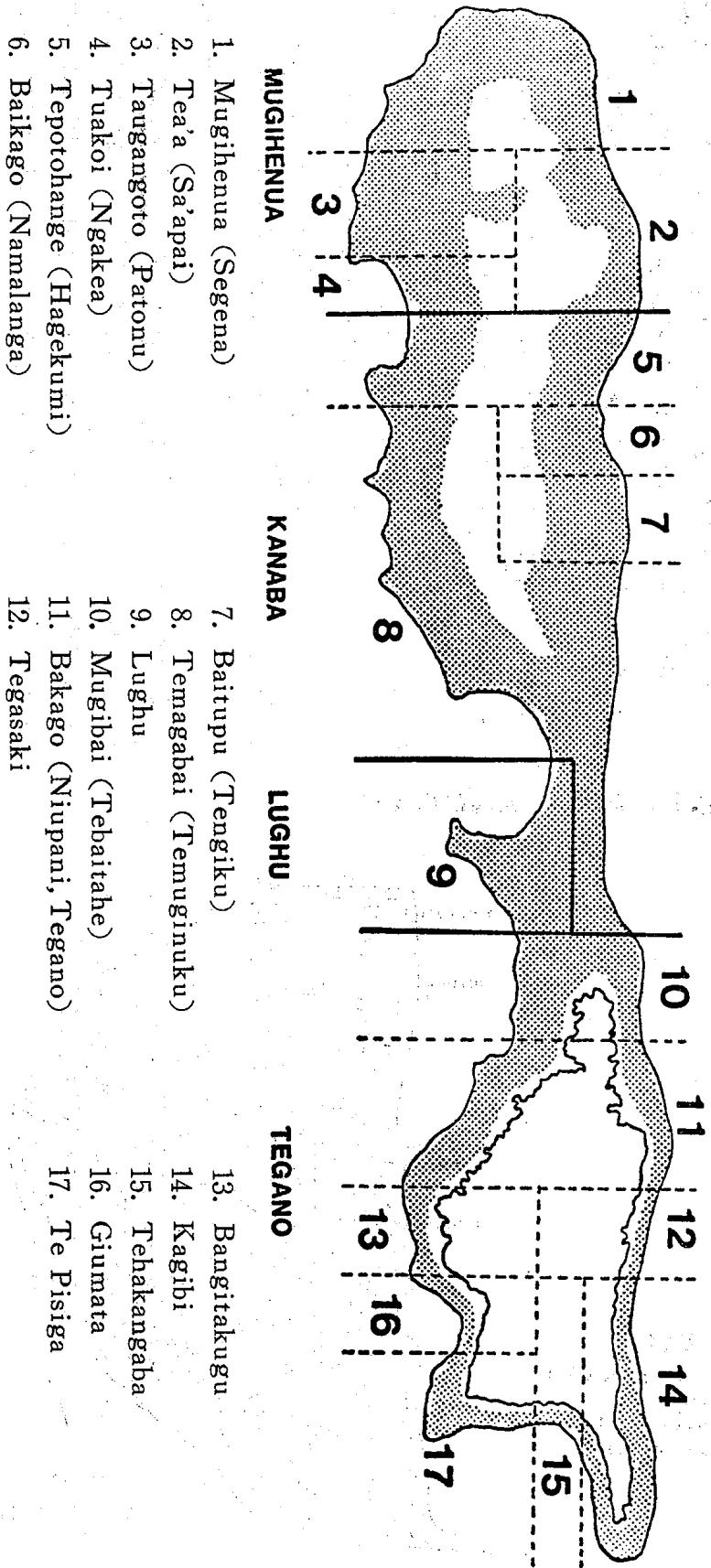
(8) 農地として利用される土壤ボケット (u'manga)

(9) 生活用水を供給する洞穴水

なんの異なる資源がひと組みのヤシトモコト、いわゆる帶状の区劃
ひものあれてこね。つまり、各社会単位の住民は、それが山の
山の上部道路 (angatu'u) と、山に直交して海岸に向う小径
の帶状の土地からすぐての資源をおんぐらかにむがだれぬ
のやある。ただ、資源を獲得するため費やされた力が少ないなこ

fig. 9. リーネージ集団 (ハノハノ) の領域分割にみられる資源利用の型

歩行距離(距離)は、生計生産のコベトに影響するから、居住地の
選択は住民たちの資源利用の戦略に依存する。
レンヘルの集落地は帶状の区劃において南北両側の海岸に向
うのひの細長い土地のリボンの結び目に位置し、島軸線に沿って
走る主幹道 (angatu'u) と、山に直交して海岸に向う小径
の帶状の土地からすぐての資源をおんぐらかにむがだれぬ
のよ。このように帶状の細長い土地の選択は、生計活動において大きな比重を占



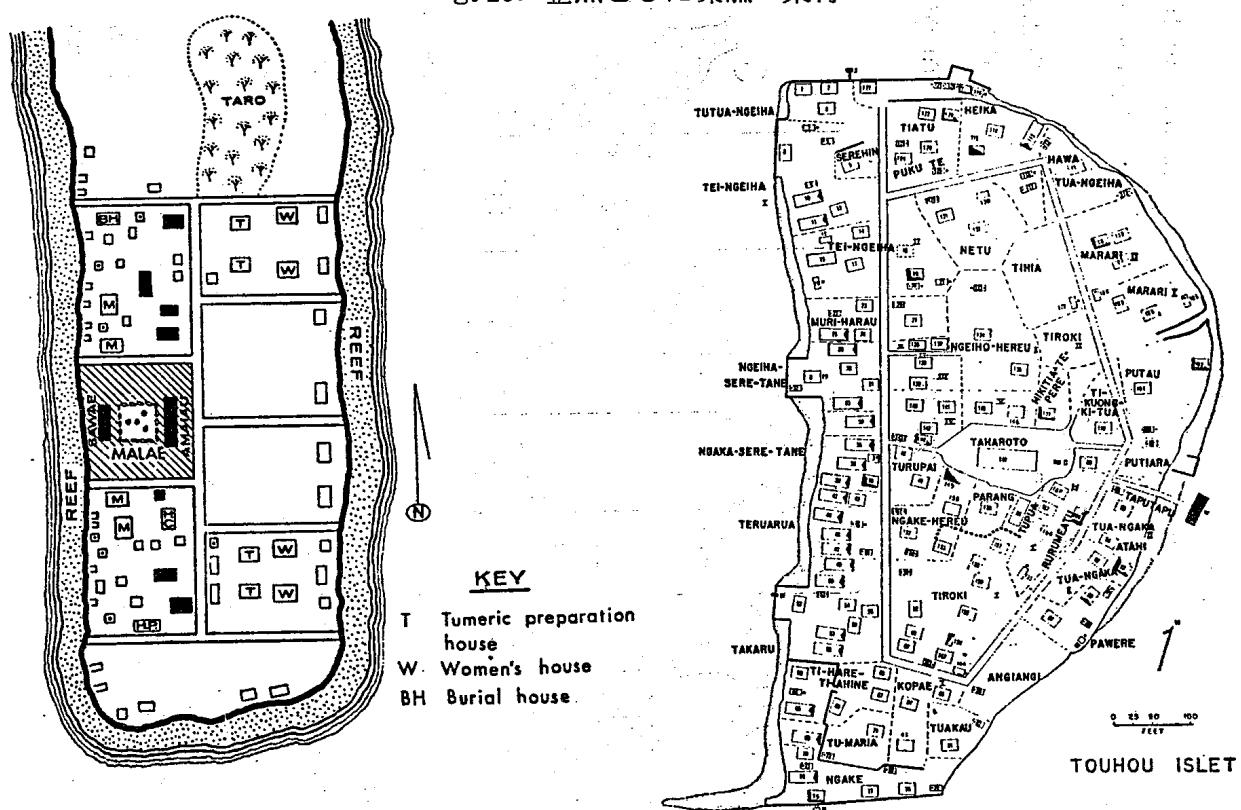
める農耕生産に対し、最少努力の解決をはかりながら、同時に多様な資源の開発を可能にしている。それは島内に均質に分散して存在する資源を効果的に開発しながら、島が支えることのできる人口規模を維持しようとする適応戦略であつたということがで

きるだろう。

レンネル島のこのようなセトウルメント・パターンは、同じボリネシア・アウトライアでありながら環礁に居住した住民のそれと比べると、きわめて対照的である。オントン・ジャワ環礁の場合、数多くの小島の中で、ルアンギウア (Luangiuia) とペラウ (Pelau) のたった二つの島にだけ、11000人 (ヨーロッパ人と接触する以前。一九七〇年現在八六〇人) もの人口を集中させ、都市的ともいえるような、きわめて計画的な塊村を形成している。(fig. 10) また、スクオロ環礁でも二五戸以上の住居が、道路によつて整然と区劃され、男性に属する聖なる建物は礁湖側、女性に属する建物は外洋側に計画的に配置されている。(fig. 10-a) 環礁湖をとり囲む環礁の島は低平で、土壤と飲料水に極端に乏しいから、人々は限られた島に集中して居住し、主要な生計生産を海洋開発にむけているのである。しかし、環礁の暮しは、しばしば過剰人口の状況を生みだし、人口支持力を失なつて急速に壊滅に追いやられることがある。最近の考古学的調査の結果はそうした証拠を見出している。

このように人口を集中して大きな集落をつくり、短期的には高い生産力をもちながら、しばしば長期にわたる人口維持の戦略を欠く環礁の生活と比べてみると、自然資源との均衡を保ちながら、

fig. 10. 整然とした環礁の集村

a カロリン諸島 スクオロ環礁
(R. Green 1970)b カピングマランギ環礁
(K. Emory 1965)

集落を分散させ、長期的に高い人口を支えてきたレンネル島の人々の暮しはまさに、対照的である。それは環礁の住民の密度独立的な適応に対して密度依存的な適応の戦略といえるだらう。⁽⁵⁾

VI キリスト教による集落の統合

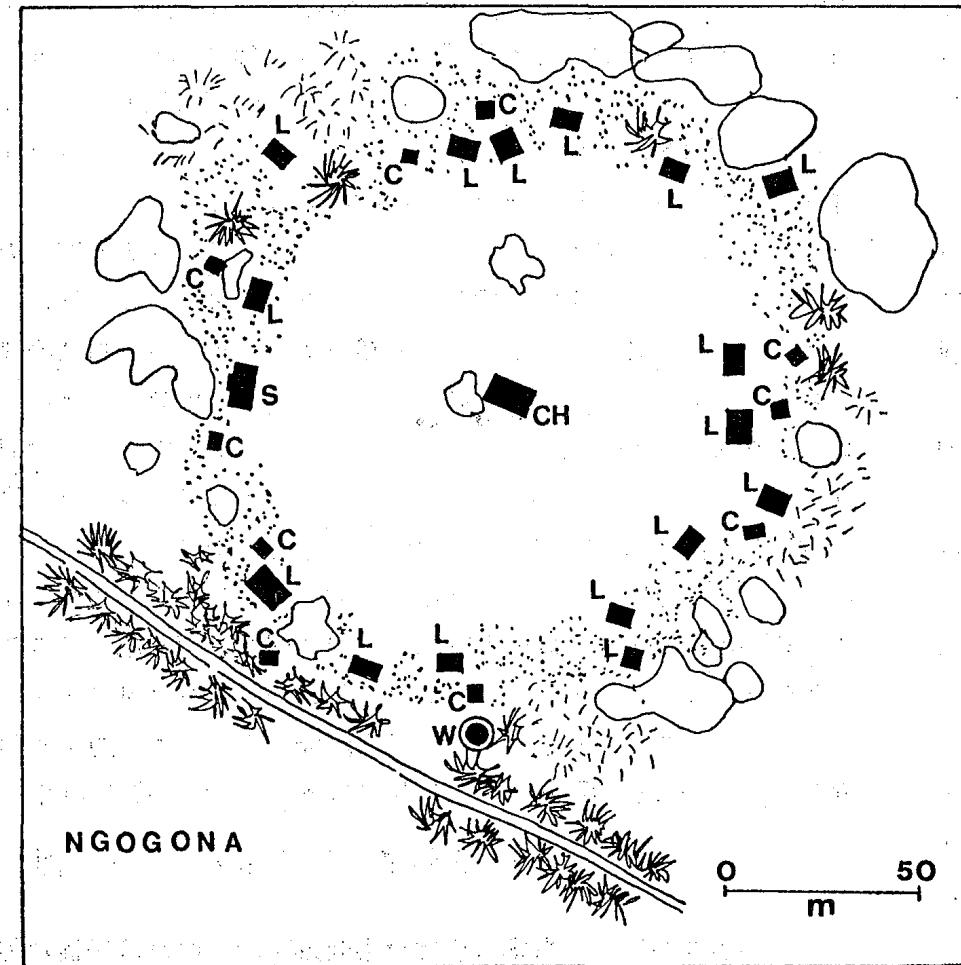
一九三八年一〇月の満月の晩に起つた集団狂気は島の人々の生活を一変させた。その混乱の中から「古い神々が島を去つた。キリストの神がすべての力に打ち勝つた。」とふれまわるものがあつられて、讃美歌の合唱がひびき、教会を建てる槌音が聞えはじめたといつ。これより三〇年近く以前にレンネル島を訪れ、一九三九年に再びこの島に渡つた Northcote Deck は、島民の生活に起つた大きな変化について、その印象を語つてゐる。一九三九年四月一日、島の南岸に上陸し、ニウペニ (Niupani) 部落に到着した彼は、首長タウポンギの「聖なる家」のあつた場所に大きな教会が建つていて驚嘆する。かつて少数の人しか住んでいなかつたこの村に、百人近い人が朝の礼拝に集まつているのを見て田をみはるのである。「かつて」、「二家族がひとつになつてブッシュの中に散らばつて住んでいた彼らは、いま、イエスの教えを求めて、こへつかの大きな集落にまとまって暮すようになつた。(Deck, N. 1945) と記つてゐる。

キリスト教への改宗は、かなり短い期間に急速に進んだようである。その圧力は単に島民の宗教的変革をもたらしたにとどまつなかつた。居住パターンをすつかり変えてしまつたのである。礼拝のために教会に接近して住居をかまえることが求められ、散在

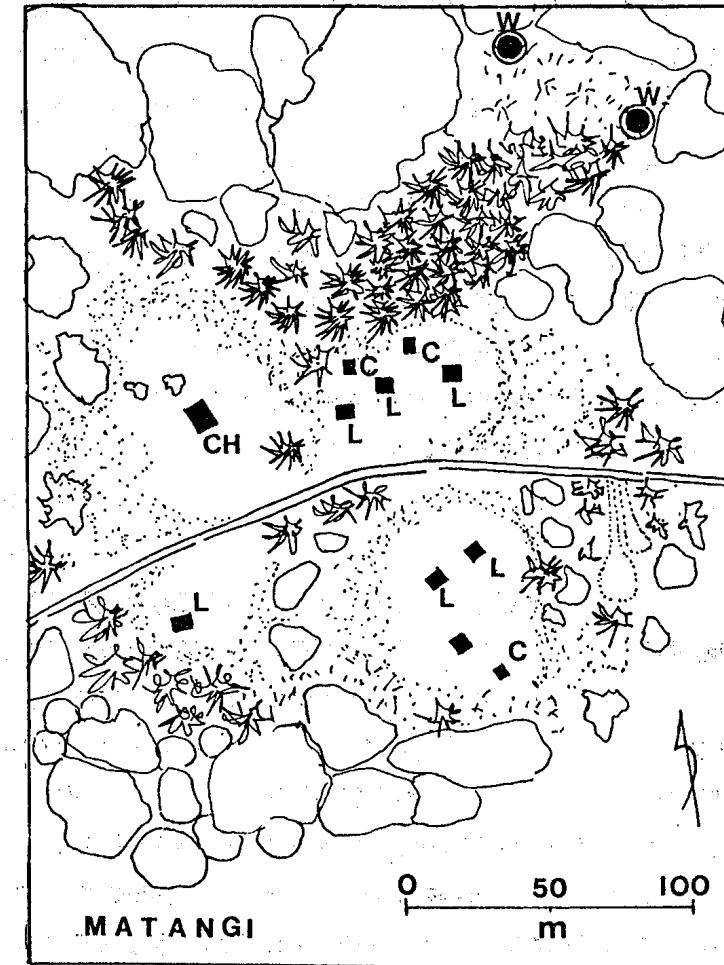
していた各地のマナハは教会を中心とする大きな集落に統合された。一九三八年以前、島の中に少くとも七三は数えられたマナハは、それぞれ教会をめぐりの大きな集落——ニウペニ (Niupani, テンガノ Tegano, テマギヌク Te-Mugginuku, テアバマグ Teabamagu, (以上 Banggikango), ハタグア Hatangua (Tetuakoi), タウカノコム Taugganggoto, カングト Kaagua (以上 Segena) ——に統合されたのである。(fig. 1-c) これらの集落は中央に教会を建ち、住居がそれを中心として並んで配置されていわば環状集落でもふくらむような形態をとつてゐる。(fig. 11-a, b)

集落の統合はどのようにしてすすめられたのか。ニウペニ村の例をみるとこととする。ニウペニ村は南太平洋エヴァンジェリカル・ミッション (South Sea Evangelical Mission) に属する集落で、現在一一六人・一九七五年) 居住する、レンネルでは一番目に大きな集落である。小高い丘の上に建てられた教会をめぐつて、二七戸の住居がたち並ぶ。(pl. 3) これらの住居群は景観としてそれをみわけるものはなにか fig. 12-a のように六つの区画 (バイガウ Baigau, テガキピア Tegokipua, リカペリ Niupani, バイカグ Baikagu, タヒンサガ Tahingiga, ハタマコト Henuagoto) にわけられてゐる。このうちバイガウは創始祖先カイトウが設けた最も古のマナハと伝えられており、かつてはカイトウ氏族全体の中心マナハであった。系譜の調査によつて、明らかになつたことは、一九三八年以前にテンガノ湖周辺にマナハ

fig. 11. 現在見られる統合集落の型 (CH:教会, L:居住棟, C:炊舍, W:洞穴)

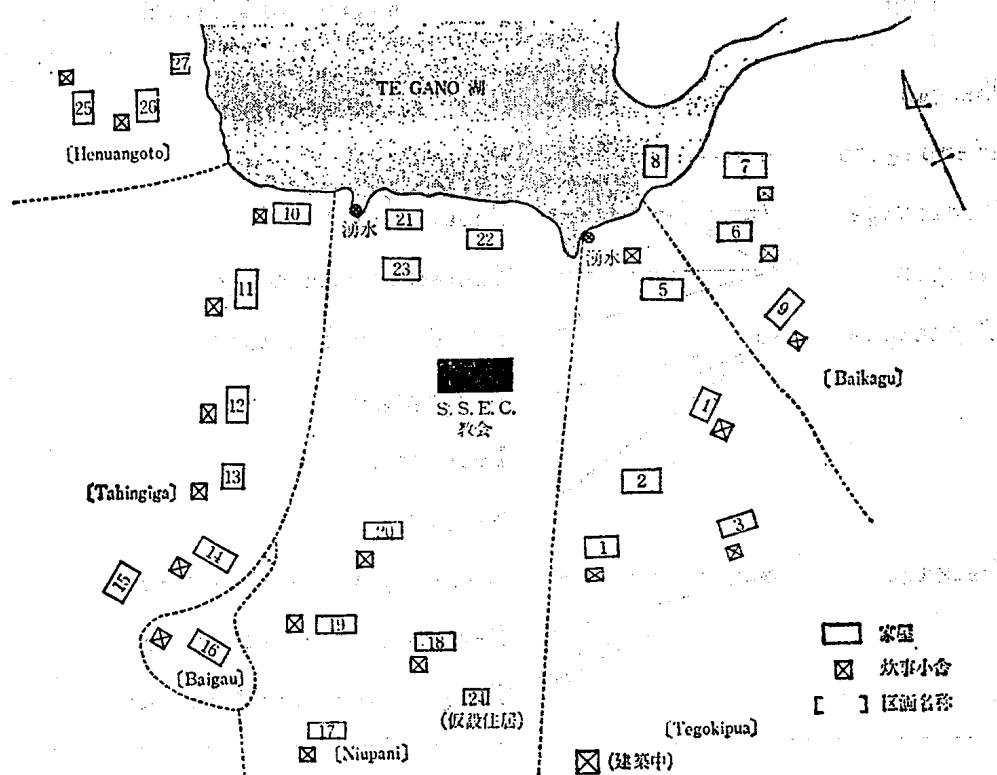


a ゴゴナ

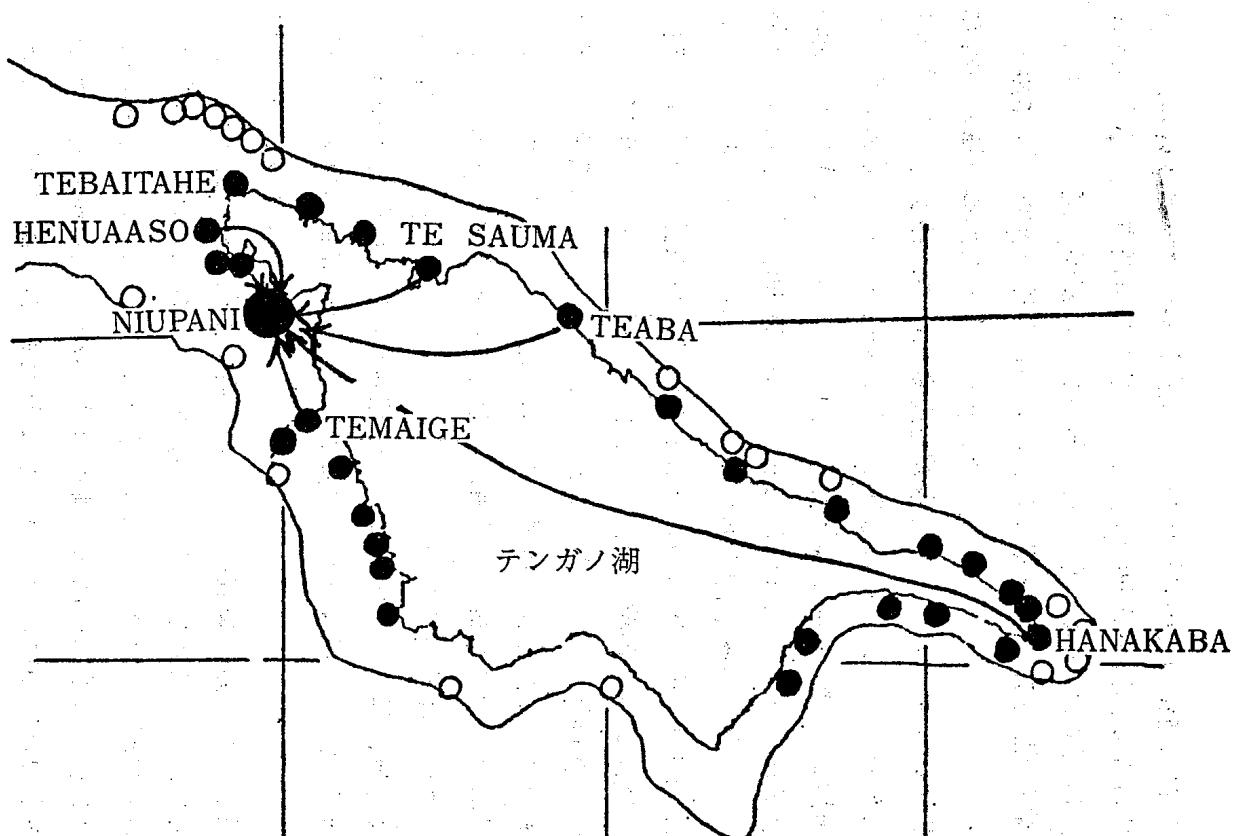


b マタンギ

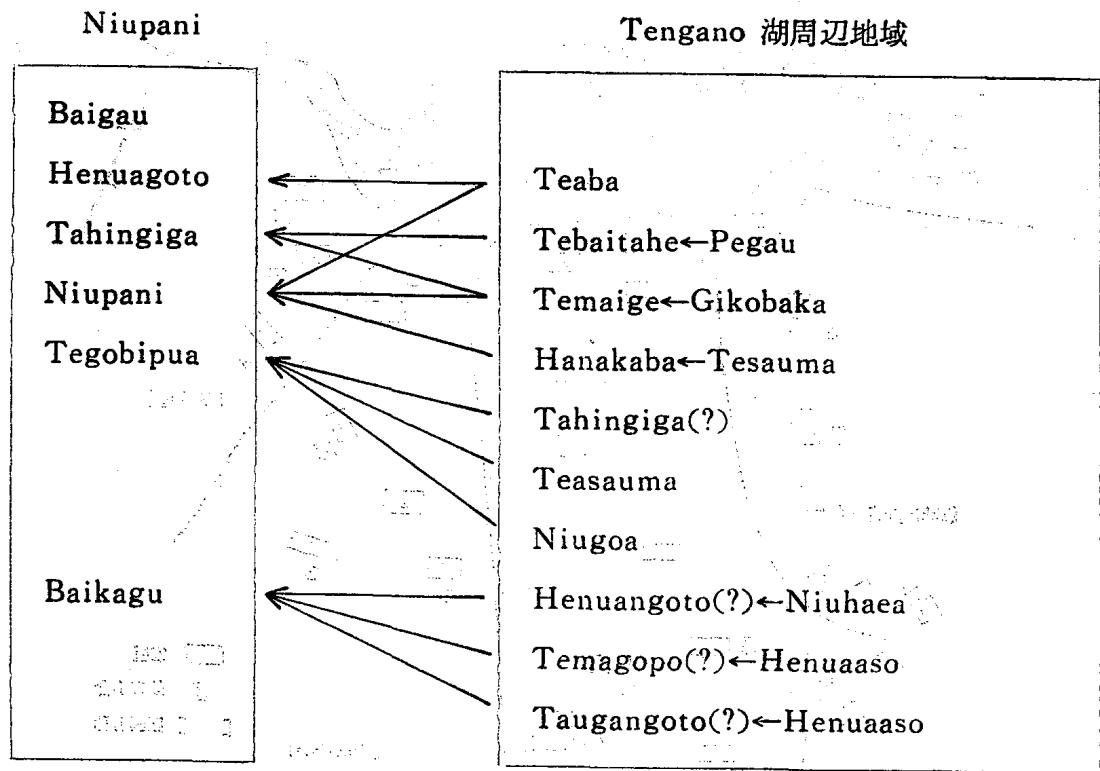
fig. 12. ニウパニ部落にみられる集落の統合化



a ニウパニ部落における区画 (瀬良1979)



b 湖岸地方のマナハを統合したニウパニ部落



をもつていた系譜の近い家族が、それぞれの区劃を占めていることである。つまり、テンガノ湖の湖岸に点在していた一〇のマナハの住民が、五つのグループをつくり、バイガウとともにニウパニ村を形成したのである。このようにして、いくつもの古いマナハが、基本的には系譜の原理にしたがって集落を統合したのである。(fig. 12-b)

キリスト教が布教のために、島民ができるだけ一ヶ所にあつめ、教会を中心とした日常生活を営ませるという方針であったことは疑いない。それは強い圧力によってすすめられた。しかし、一方で一九三八年に先立つ時期の異常な人口減少がそれを可能にしたのかもしれない。文明にはじめて接触した一九一〇年ごろから約二〇年間、レンネルの人口は激減していた。N.Deck は一九二一年にレンネルの住民が五〇〇人以下に低落していたことを記録している。(Deck, N. 1921, 1945) また Birken-Smith は、一九五一年に一五才から二五才の間の年令層が極端に少いことに注目して、一九二〇年代から三〇年代にかけておこった出生率の低下をうづけている。人口減少の原因は一九一〇年ごろ到来したという淋病による出生率の低下があつたほかに、今日なお、死亡原因の八十%を占める、結核や肺炎、インフルエンザなどの呼吸器系疾患の蔓延があつたであろう。

伝統社会の隔離の壁がとりはらわれた時に人々は文明の病氣に、またたく間に感染したのである。一九〇〇年ごろまでの人口は約八〇〇人と推定されるから、一九一〇年から一〇年代にかけて、人口は半分近い水準に低下したことになる。(近森一九八二

a) これによつてレンネルの社会組織や政治組織は、實際には機能しなくなつてゐたのであるまい。その後、人口は急速に回復のカーブをたどりはじめるが、この間、レンネルの社会は一種の弛緩状態に置かれていたと考えられる。キリスト教はまさにそのような状況の中で受け入れられた。キリスト教が旧来の秩序にとって代り、人口の低下が、集落の統合を可能にさせたと考えられるのである。

VII 新しい生活

キリスト教はまず、人々の生活のリズムを大きく変えることになつた。村の広場の一隅に、ガス・ボンベの空筒が吊され、これが一日に幾度となく、けたたましく叩かれる。人々はそのたびに、村の中央の教会に集まつて礼拝をささげなければならなかつた。S・S・E・C派は日曜日に、S・D・A派は土曜日に「一切の労働を禁じ、サメ漁をはじめとするいくつかの生産活動を「タブー」にした。それは今日でさえ厳格にまもられている。キリスト教は教会への奉仕を要求し、毎日の労働時間の配分を変更した。教会を中心とした新しい集合的な村は、こうして教会活動を推進するためには有利であつたにしても、それが生計生産とのかゝわりを無視したものであつたことが、次第に島民の生活に矛盾をもたらすことになる。

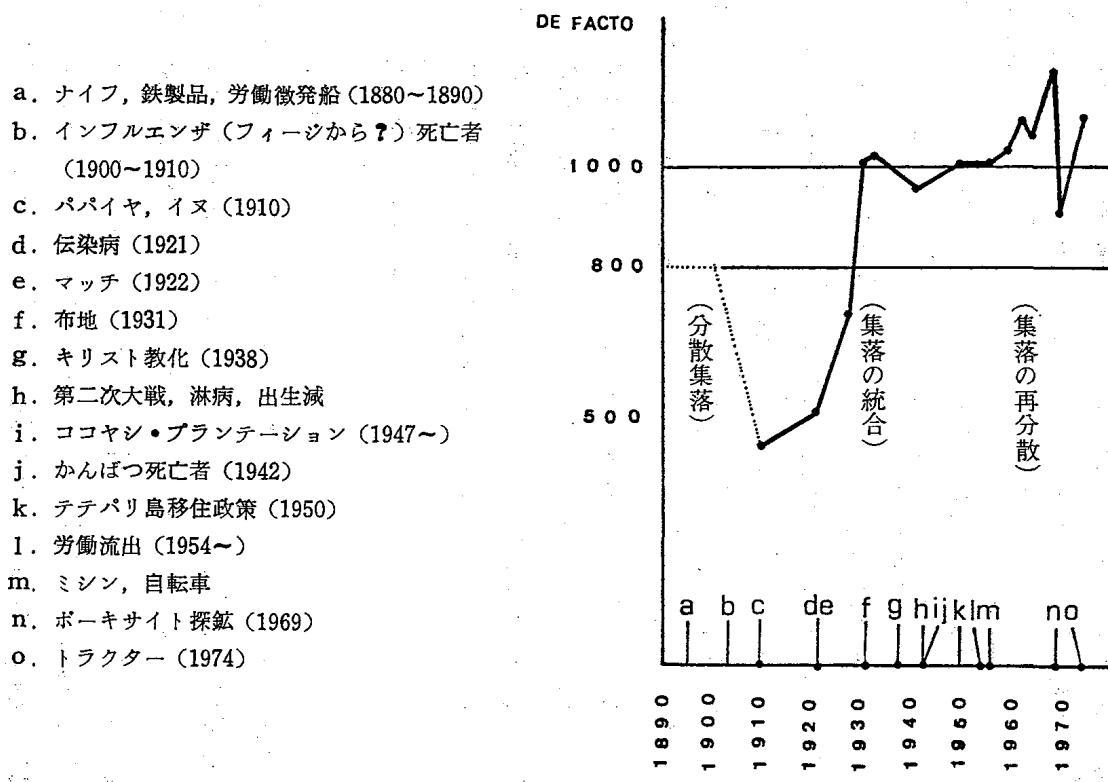
これに加えて一九三〇年代後半からはじまつた急速な人口増加は、事態をきわめて深刻なものにした。文明を入手するために人々は高い代償を支払わなければならなくなつたのである。

一九三〇年代から、人口は回復にむかって上昇曲線をたどり、一九五〇年代には、すでに過剰人口の状態に達する。伝統的な社会において人口調節の機能として作用していた社会集団間の戦争、避妊、墮胎、嬰児殺しなどは、キリスト教によつても厳しく禁じられることになつた。それらを罪とする社会倫理を人々に植えつけたのである。また、すべての伝統的儀礼が廢止されたこと

農地は過度に使用されるようになつた。そして、さかんになつたコプラ生産は、土地利用の不均衡に一層拍車をかけることになつた。島民はココヤシが、かららずしも肥沃な土地でなくとも生育すると知つても、コプラの乾燥、運搬などのことを考えると集落に近い農耕適地をココヤシ林に明け渡さなければならなくなつた。

集落が統合されたことによつて、今まで用いていた多くの農地は遠くなり、その往復に長い距離を歩かなければならなくなつた。そのために遠隔地の農地は、やむなく放棄され、集落に近い

fig. 13. 人口の変化



によって、人口制限に寄与していた宗教儀礼も破棄された。さらに布教活動は、しばしば医療活動、投薬による病人の救済をともなっていたから、それによる死亡率の低下もまた人口の増加をもたらすことになった。一九二一年に五〇〇人 (N. Deck) であった人口は、一九五一年に一〇〇九人 (government)、うち六七七才以下が二七一人約二六・八%を占め、出生率が著しく回復するとともに三〇年間に二倍の人口に達した。(人口増加率は一九三八年と四七年〇・九%が、四七年と六二年に三・一%を示めしている) (fig. 13)

一般に人口の過剰状態は、資源の量や技術など、多くの変数とかかわっているから、これを規定することはきわめてむずかしい。だが、英植民地政府がたてたレンネル島民の移住計画は過剰人口が、現実のものであつたことを示めしている。

一九五〇年、政府の Resident Commissioner は、レンネルの住民を二年交替で五〇家族ずつ、ソロモン諸島西部にあるニューギニア島近くの無人島 Tetiipari に移住させる計画を立てたのである。これはレンネル島民の人口、食糧問題がすでに深刻な脅威になつていると判断したためである。(実際には島民によつてこれが拒否され、まもなくホニアラの町へ労働者として人口の流出がはじまる) 食糧の不足はキリスト教が伝統的な社会組織を変更したことにも一因がある。従来、資源の配分に機能を果していった氏族やリネージュの首長がその役割を失ない、経済的な配分の組織に混乱を生じたのである。

このようにみてくると、キリスト教は、ただ島民に宗教的変革をくわえただけにとどまらない。そのインパクトはきわめて精緻な均衡の上に成り立っていた伝統社会の各部分を連鎖的に破壊していくのである。

キリスト教による集落の統合は、従来の労働のリズムを破り、土地利用のパターンを変えた。貨幣経済の導入にもとづく、ココヤシ林の拡大と農地の縮少は、いちじるしく生産性を低下させ、まもなくはじまつた急速な人口増加が、食糧の不足をもたらした。伝統的な経済の配分組織の崩壊は、その事態を一層深刻なものとしたのである。近代文明はしばしば、それを受け入れた人々の暮らしを根底からおびやかすのである。キリスト教は、この小さな島において、人々に文明との対決をせまつたのである。

VIII

生存のための対応

こうした生産性の低下と過剰人口に直面して、島民はどのような対応をとったのか。それは二つのレベルにあらわれる。すなわち、農耕生産の集中化のレベルと人口の調整あるいは再配置のレベルである。

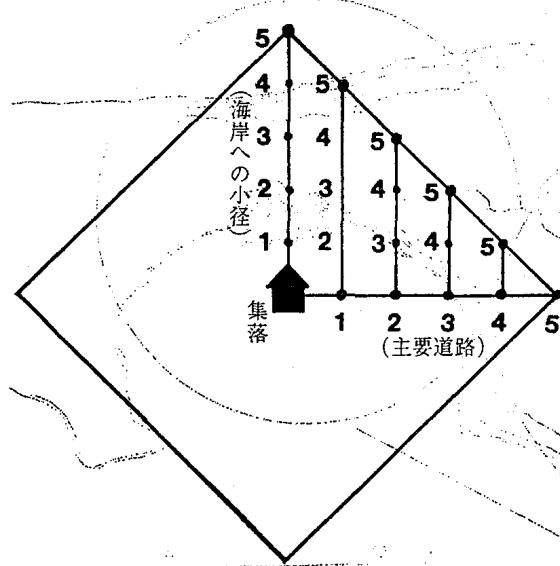
農耕の集中化は、休閑期間の短縮によって農地利用の効率化をはかることと、新しい作物としてサツマイモの栽培を拡大することであった。休閑期間の短縮については、すでに別稿でとりあげたので、あらためて述べない。それは環境認知の精緻化による生産の集中化であった。(近森一九八二-b)

一九〇〇年ごろ、島外からもたらされたサツマイモは、伝統的

な根裁植物の耕作法と一致していたから、島民には受け入れられやすかった。ヤムイモを収穫したあと、最初の休閑地にサツマイモを植えつける試みは、実際にひとつの革新であつたといえるだろう。ヤムイモの平均七年、タロイモの平均五年の休閑期間は、サツマイモによって二年ないし三年に短縮された。それが高い収量をもたらしたことは確かである。

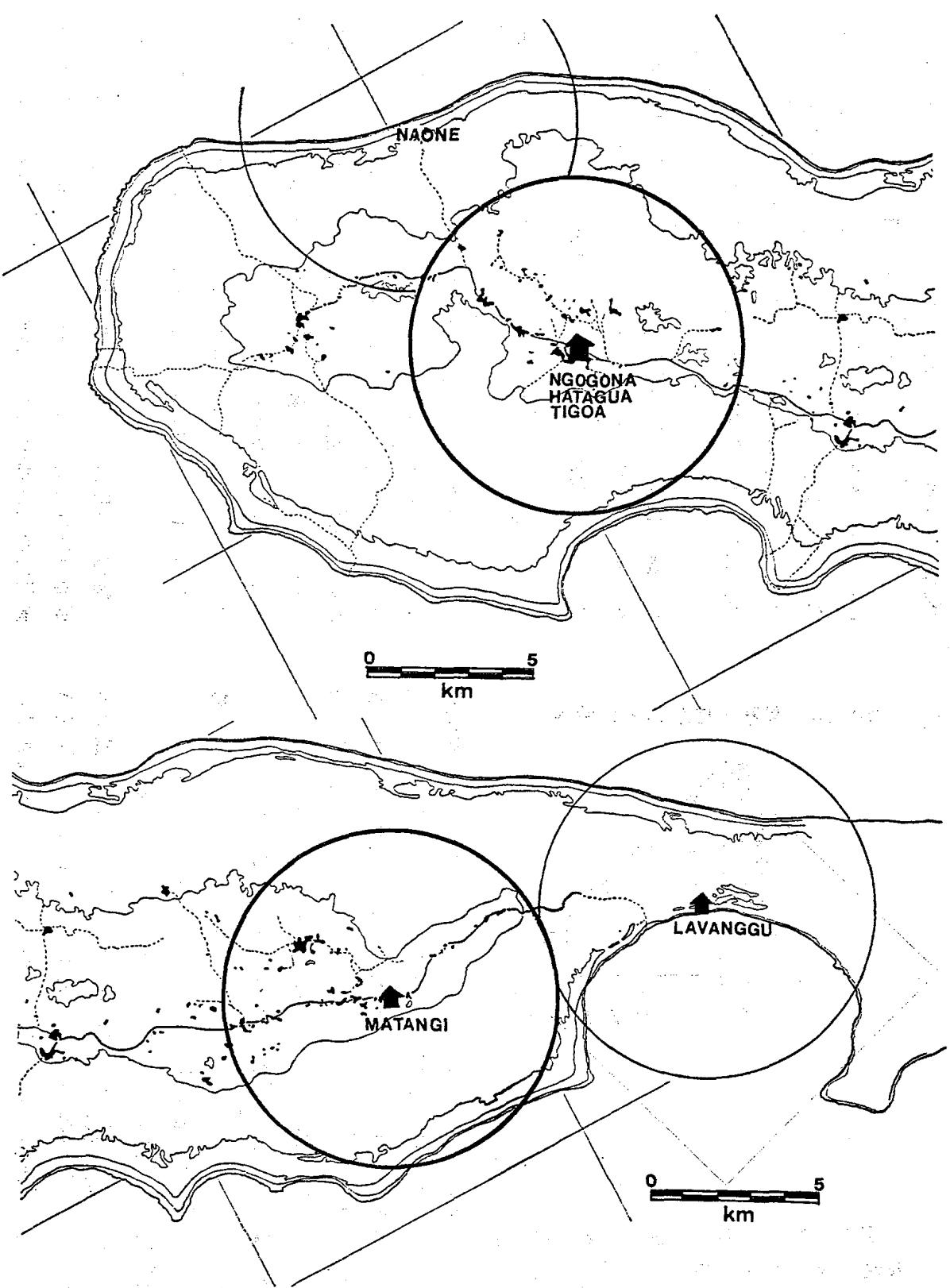
しかし、その植付パターンが、休閑林の再生を危機に陥し入れるという結果を招くことにならうとば、島民自身も気付かなかつた。サツマイモを栽培した耕地では、とくに休閑期間の初期の段階に優占する樹木や灌木が衰退し、外来の草本が繁茂するようになる。とりわけ集落地に近い農地は使用頻度が高くなつて、地力が奪取される。今日、集落地周辺ではイネ科の草本 ngei が生育

fig. 14. 集落と農耕地との関係



(横軸は盆地の中心を通る主要道路、
縦軸は集落から海岸へ向う小径 anga
ki tai を示めし、数字は相対的な距離
をあらわす)

fig. 15. ゴゴナおよびマタンギ部落を中心とする半径5kmの土地利用



	Ngogona	Matangi
Forest (not suitable for cultivation)	92.91%	94.59%
Fallow Land	1.30	0.83
Coco-nut Plantation	1.59	1.28
Cultivation	0.87	0.46
Grass	2.00	1.53
Swamp	0.83	1.21
Others	0.41	0.05
(Fallow/Cult.)	1.49	1.80

は、休閑期間の短縮や新作物の導入によって一時的に埋め合せがなされたとはい、耕地利用の安定性をいちじるしく、おびやかす結果を招いてしまった。
 (近森 一九八五)

すでに述べたように、一九三八年以前の集落は各所に分散して、農地の近くに立地する傾向が強かった。遠くの農地を開くときには居住地もその近くに移動させ、集落と農地との間の徒歩距離は、一kmをこえることはめったになかった。基本的には、農耕地の選択は、集落を中心として最大徒步距離を一邊とする直角三角形の範囲内でおこなわ

して、すでに草原化が進行しているところさえみられる。こうしてみると、環境退化に対する島民の対応策は、休閑期間の短縮や新作物の導入によって一時的に埋め合せがなされたとはい、耕地利用の安定性をいちじるしく、おびやかす結果を招いてしまった。

は、休閑期間の短縮や新作物の導入によって一時的に埋め合せがなされたとはい、耕地利用の安定性をいちじるしく、おびやかす結果を招いてしまった。

その後、今日にいたる四〇年間の社会変動は、急速な人口増加による土地利用の変化に関連していると考えいえるのではなかろうか。現在、集落地と農地の間の距離は直線距離にして、実に五kmを越える場合がある。fig. 15は航空写真と踏査による観察について、現在のゴゴナ (Ngongona) 村とマタンギ (Matangi) 村を中心として、一時間の歩行行程五kmを半径とする円内の土地利用の割合をしたものである。これでみると休閑地面積の耕作面積に対する割合は、ゴゴナ村を中心とする円内で一・四九倍、マタンギを中心とする円内で一・八倍しかない。つまり、徒步一時間のコストでは休閑期間を維持することがほとんど困難であることを示めしている。農耕生産のコストが増大し、農地の不足が深刻な事態になっていることを、これによつて推測することができる

のである。

こうした事態に直面して、島民はすでに第二次レベルの対応策を選んだのである。それは、他島への人口流出と、統合集落を再び分散させることであった。

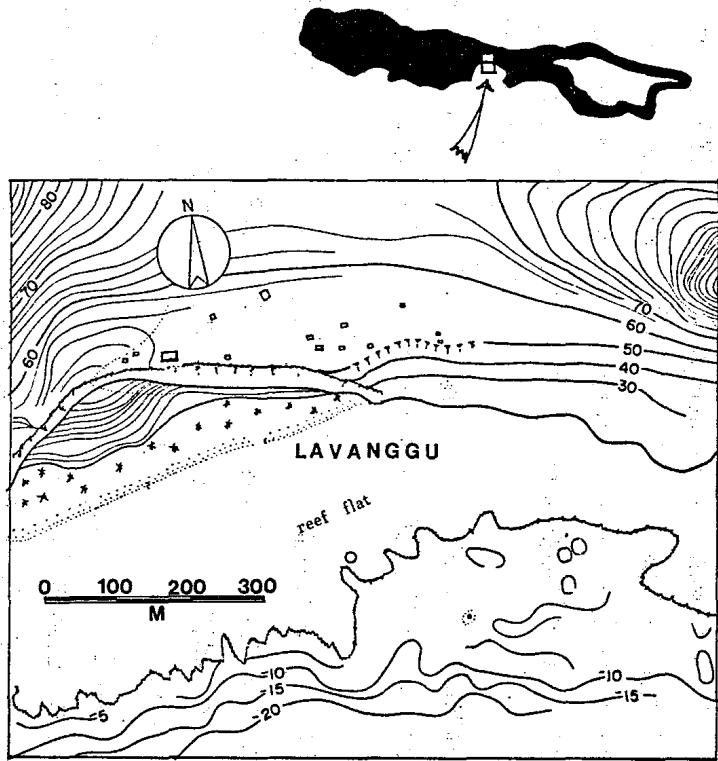
一九四五年、孤立化を強いられた太平洋戦争が終ると、ソロモン諸島の他の島に労働者として働きにでるものが現われてきた。それ以来島における換金作物 (ココヤシ) の栽培と、島外での賃金労働との選択が、島民の経済価値の大きな規準となつた。一九

六六年には約三〇〇人が島外へ流出している。(一九七五年は一人(瀬良一九七九)一九六〇年代から七五年にかけて、かなりの変動があるが、平均は△二十五%の人口が流出している。)それはたとえ現金収入と新しい経験の欲求であつたにせよ、耕作地の欠乏と人口圧の増大が人々に強いた島外への離脱であった。

鉄製のブッシュ・ナイフが普及し、樹皮布(タペ tapa)が布地(calico)にかわり、労働量はかなり軽減されたかにみえる。しかし、それらを購入するために、人々はコプラ生産や賃金労働など、新たな仕事に従事しなければならなくなつた。人々の労働量は全体として軽減するどころか、むしろ増大したのである。

統合集落の再分散は、それがもつたままの矛盾を解消する手段としてあらわれてきた。その最も典型的な形態は、島の南岸、カンガヴァ湾に面するラバング(Lavanggu)村の成立についてみることができる。(fig. 16) ラバングは一九六〇年代に入つて新しく開かれた集落である。ここはかつて、死者の靈魂が死の国ポウンギ(poungi)に向けて旅立つところと信じられて、そこに人が住むことを恐れた土地であった。キリスト教の布教はかつてのそうした聖地を世俗に解放することになつたのである。ところが、ラバングは島の外周丘陵部に位置していて、標高が五〇mをこえる。(fig. 17) 後背地に耕作適地をもつものの、その位置は、地下水位からなるかに高く、生活水を全く欠く場所である。かつて人の居住を許さなかつたのはそのためでもあつた。もし、水供給の問題が解決すれば、そこはリーフの発達した漁場を前面にひかわってトタン屋根の家屋が建てられるようになつた。トタン屋

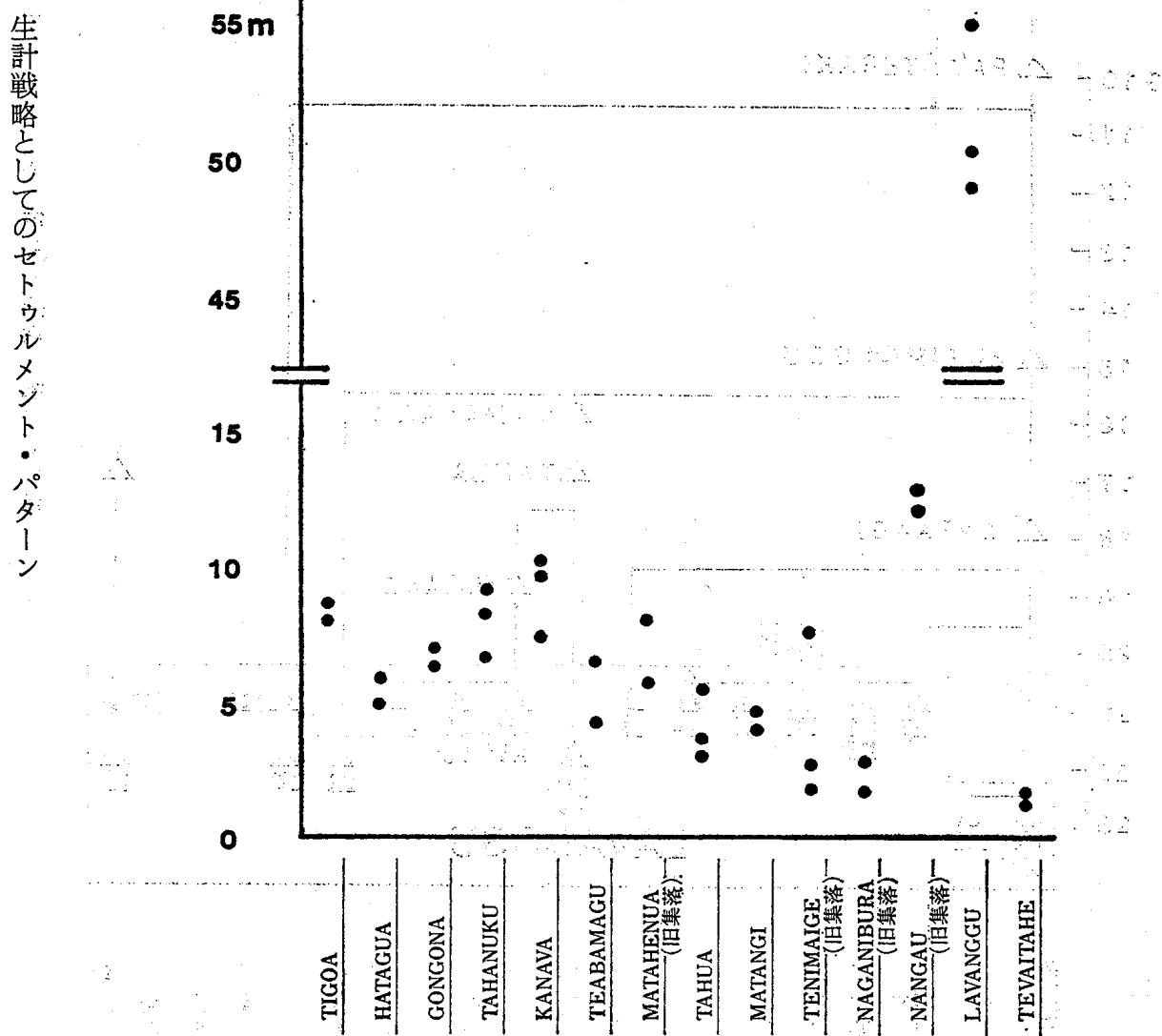
fig. 16. ラバングの集落地とリーフ・フラット



そればかりではない。そこは二ヶ月に一回、首都ホニアラから回航してくる政府のスクーナー船が投錨できる唯一の湾に面している。

ラバング村の成立を可能にしたのは、文明の器財として導入されたドラム罐とトタン屋根であった。一九六〇年代のはじめに、ここに八〇〇リットル(一一〇ガロン)のドラム罐が三基、天水を貯えるために設置され、パンダナスとヤシの葉で葺いた屋根にかわってトタン屋根の家屋が建てられるようになつた。トタン屋

fig. 17. 主要集落地の標高



根からドラム罐に注ぎ込まれた天水は、生
活用水の問題を一挙に解決したのである。

(P. 1, 5, 6)

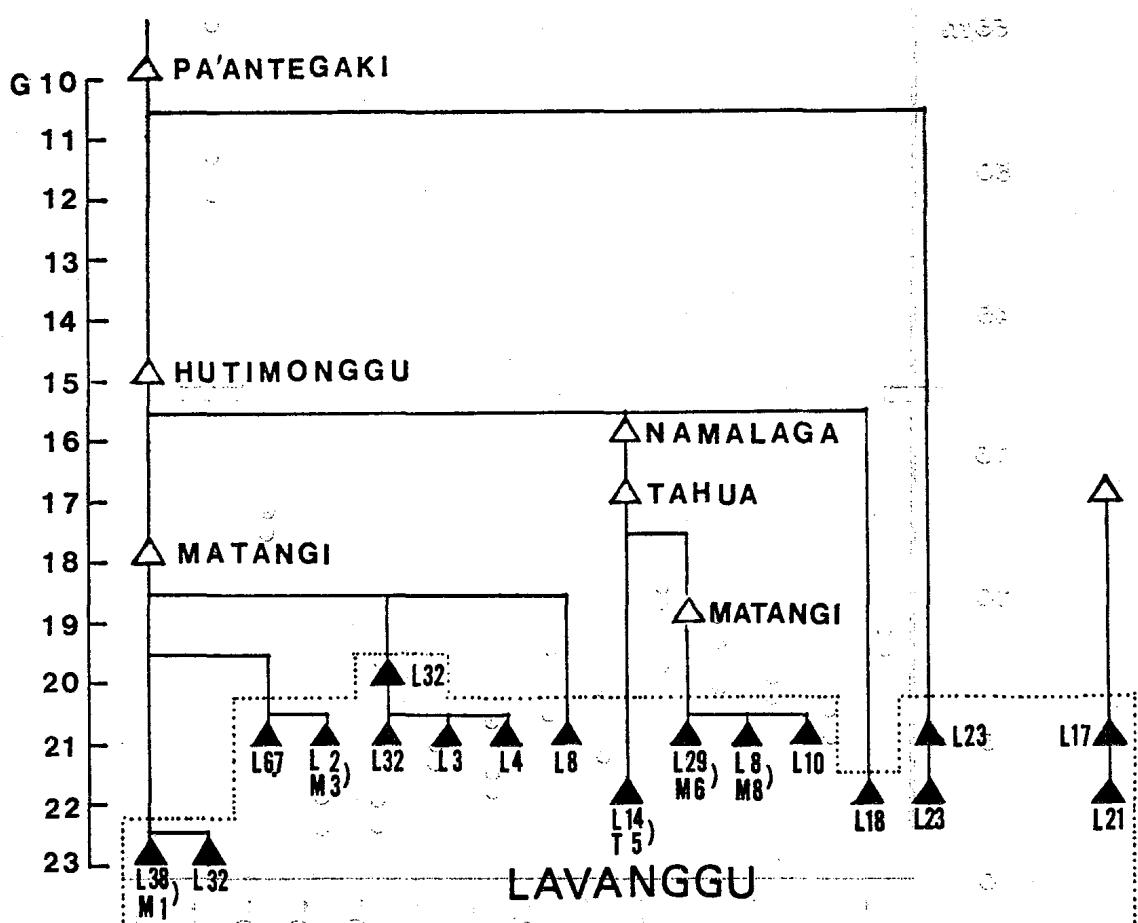
すでに述べたように、農耕生産のコスト
が限界に達していたと推定されるマタンギ
(Matangi) 村の構成員が、分村のかたち
でラバングに居住を開始した。興味深いこ
とに、その過程は全く伝統的なリネージ分
岐の原理にしたがって進行している。(P. 8)
今日、ラバングは六一人(男性四〇人、
女性二一人)が居住する大きな集落に発達
したのである。(P. 9)

レンネル島には港湾施設がないから、リ
ーフの外側に停泊した船からカヌーによっ
て物資の積おろしがおこなわれる。島から
コプラが出荷され、その見返りとして、米、
砂糖、ビスケット、缶詰などの食品、衣類、
煙草、灯油、ランプ、ブッシュ・ナイフ、
トタン板、ドラム罐などの生活物資が持ち
込まれる。一回当たりの量は一〜一トン弱で、
年間せいぜい七〜一〇トン程度であるが、
すべてラバングに荷上げされる。こうし
て、ラバング村の成立は、ニウバニ村事件
について、レンネル島民の生活史を大きく

変ることになったのである。

現在、レンネルには西部に一七、東部に四、合計二の一の集落があり、総人口は一、一一五人（一九七五年）を算える。統合集落からの再分散は、マタンギからラバングへの分村においてみられたように、依然として伝統的な強い父系原理によっておこなわれている。土地に対する圧迫が、むしろ系譜の原則を強調しているのかもしれない。今日、集落の再分散化は、島の西部に活発で、一九七〇年に軽飛行機の滑走路が開かれたティンゴア周辺にもうひとつ新しい人口重心の移動がおこりつつある。その様子は、あたかも文明への戸口をもとめて島民が群つてくる姿のようである。

LAVANGGU



IX トタン屋根

レンネル島の人口収容量に限界を与える要因のひとつに水供給があったとすれば、トタン屋根が果す役割は重要である。トタン屋根を張った住居は、強い太陽の輻射熱によって、けして居住性のよいものではない。それでもかゝわらず、一九六〇年代から七〇年代にかけてトタン屋根の高床住居（ハング・ポーロア hange pooloa, ポーロアはビジン・イングリッシュでフロアつまり床の意味）が急速に普及した。一九七年、ほゞ一五%の住居がトタン屋根を採用してい

る。（fig. 19-b）

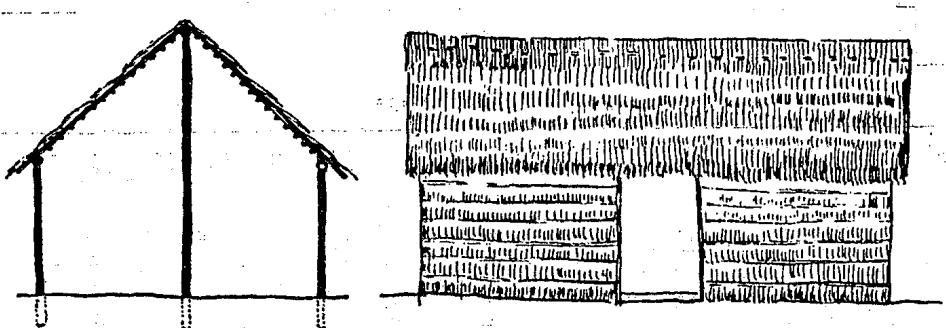
トタン屋根に対する島民の評価は、それが生活水の獲保を容易にしたことのほかに、建築作業をいちじるしく軽減したことを強調する。ゴンゴナ村での観察によれば、間口五ヒロのパンダナスの屋根をもつ家屋（ngaho ngima）の建築に要したのべ労働日数は、六八日である。（枠組づくりに九日、パンダナスの葉による屋根葺きに一五日、床づくりに六日、パンダナスの葉を編んで壁にとりつけるのに二八日、そのほかに梯子や戸の製作、とりつけがあるが、それらを除外して合計六八日）これをみると屋根葺きに全体の三分の一弱を充てているが、これをトタン屋根にかえると、耐用年数が約一〇〇年として、二回の屋根葺きの作業労働がなくなる。トタン屋根にすると一軒の住居で、少くとも三〇〇四〇労働日数が軽減されることになると推測される。

しかも、この省力化は労働軽減にとどまらない。パンダナスは主として、集落周辺の可耕地に栽培されるから、何よりも限られた農地空間そのものを節約することになった。トタン屋根の採用は、すでにのべた人口圧の増大に対応する、ひとつ手段として役目を果すことになったのである。

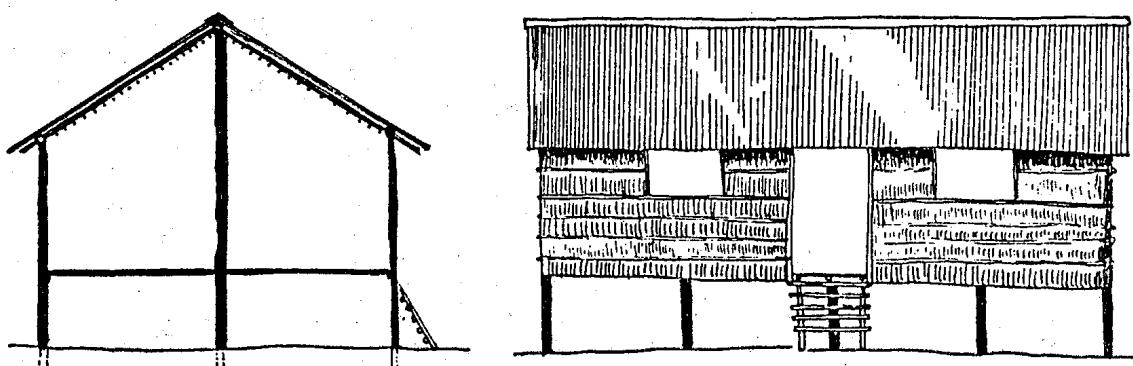
トタン板の価格は一戸あたり平均約八〇〇~一三〇オーストラリア・ドルであるから、コプラの出荷による島民一人あたりの平均年収約二〇オーストラリア・ドルからすれば、それは非常に高価なものである。そのためにも、彼らは現金収入の途を一層求めなければならない。

このようにして、島外への人口流出と集落の再分散化は貨幣経済の枠組みの中で進行したのである。もはや、伝統的な生活技術

fig. 19. 現在の住居

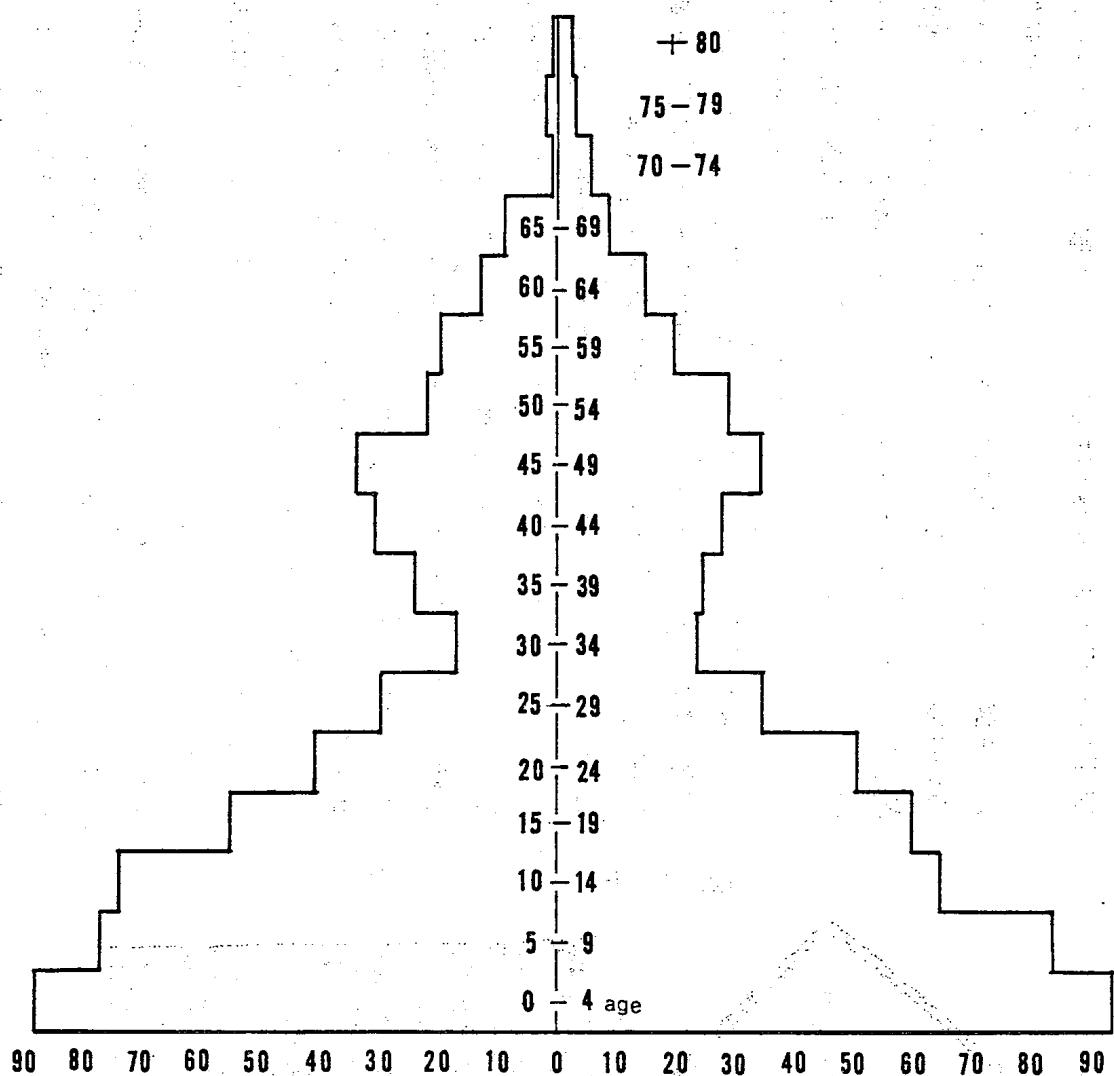


a 地床式居住棟 (paito)



b 高床式居住棟 (hange pooloa)

fig. 20. レンネル島全人口 (de facto) の年令別人口構成

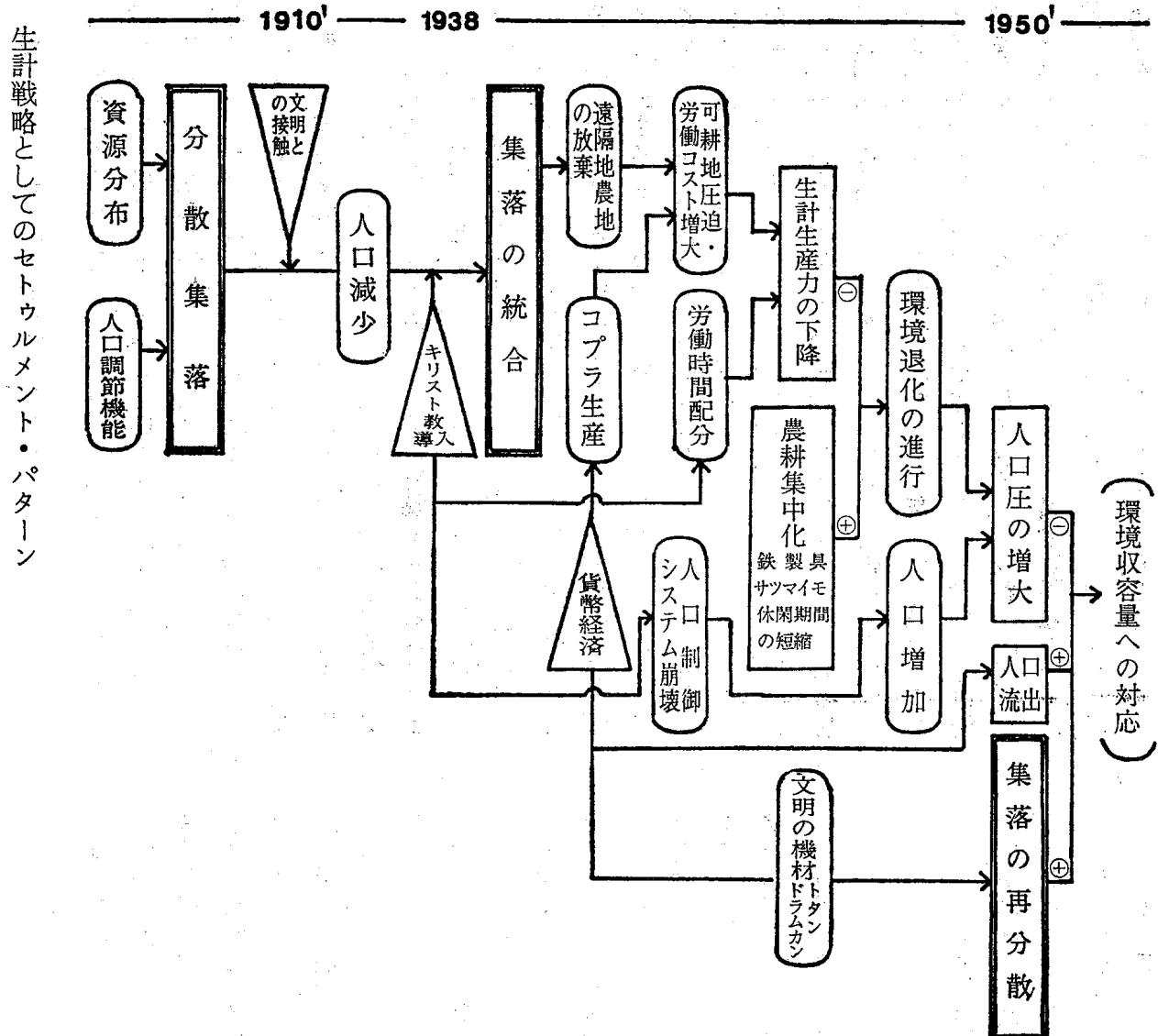


だけでは、環境の退化に対処しきれなくなつたことなのである。

さて、人口流出は新たな問題を生んだ。島民の環境認知能力の喪失である。賃金労働を求めて島を離れるものは、男女ともに二〇才から三〇才までの青年層に集中しているから、この期間に島の環境知識を身につける機会を全く失なつてしまふ。(fig. 20) 焚煙休閑林の微細な変化や土壤の活力を読みとるための言葉を年長の世代から学ぶこともなく、島に帰った若者は、地力を收回奪された土地を眼の前にして、なすすべがない。自分たちの肥沃な土地をかえりみず、賃金労働を求めるようになった多くの太平洋の住民と同じように、レンネルの人々もまた、「文明化」の道を歩みだすのだろうか。

「ホニアラの町に出かけた若者たちは何も知識を持っていない。海のことも、畑のことも、森のことも知らない。持っているのはお金だけだ。昔ながらの習慣を奪つた文明は、この島に何を与えたのか。それは、みなホニアラのマライタ人が悪いのだ。」タフア老人のつぶやきはニウパニ事件以来四〇年間の社会変化の結末を語つているようにも聞える。将来、島の人口を増加させるような生活技術の革新によって、環

fig. 21. レンネル島における集落変化の諸要因



生計戦略としてのセトウルメント・パターン

集落の配置は、それ自体、生計のための戦略でもある。それは集団間の競争、協力、意志伝達などの社会的・政治的関係を示すとともに、開発される資源について消費と生産、そして投入される労働量と技術の方を反映している。一九三八年以前のレンネル島にみられた集落の特徴的な分布は、均等に分散した資源の開発と保全によく対応して形成されたものであった。儀礼やタブー、さまざまな慣習や組織によって、資源の開発と保護、人口の抑止をはかりながら、島の社会は一定の環境のもとで、最大の人口収容量を維持してきた。ときには、墮胎や集団間の戦争などによる直接的な人口制限の作用が働いたとしても、長期的に

境収容量の増大がはかられるのか。それとも他島への移住を強いられるのか。さもなければ再び何らかの人口調節機能が働くのか。これはひとり、レンネルの問題ではない。今日、太平洋の島に住むすべての人々が、生存を求めて模索する共通の課題なのである。

X まとめ

それを可能にしたのは、島に住む人々の知識が、自然と人間との間に、きわめて微妙な均衡を見出していたからにほかならない。

島のローカルな知識を無視した近代文明の侵入は、そのバランスを破壊した。一九三八年、キリスト教による集落の統合は、その象徴的な経緯であった。文明との接触によってはじまつた激的な人口変動と環境退化、そして生計生産力の低下は、たとえば旱魃やサイクロンの被害に対して、従来、島の社会がもつていた復元力をはるかに超えた衝撃であった。その衝撃に対するさまざまな対応が、遅れて文明世界に足を踏み入れた島民たちに、ひとしく負わされた近代化の過程であつたといえるだろう。(fig. 21)

集落の統合化によって、まず遠隔化した農地の利用が困難になり、貨幣経済の導入とともにはじめたコプラの生産が、限られた耕地を圧迫することになった。農耕生産のための生産コストが大きくなり、生産性は下降した。これに対応して島民は、新しく普及した鉄製具によって技術的な効率化をはかるとともに、農耕生産の集中化をすすめることになった。しかし、一方、キリスト教による医療衛生の改善努力と、伝統的な人口制限システムの崩壊が、過剰人口の状況を将来することになり、全体として農地の疲弊があらわれてきた。休閑期間の短縮や、新しい作物の導入などによる農耕の集中化は、一時的な対処でしかなかった。人口制御と環境保全のメカニズムを奪われた社会は、そのわずかな効果をマイナスにひき戻してしまった。こうして環境収容量への圧迫に直面した人々は、新たな居住戦略をとることになった。それが集落の再分散化と、人口調整としての人々の島外流出であった。

コプラ以外に市場向けの資源をもたなかつたレンネルは、島民を移動労働者として島外に流出させるよりほかになかつた。今日、島民の約二五%以上が、つねに首府ガダルカナル島のホニアラに居留している。(ホニアラのマタニコ川の河口とホワイト・リバーの川沿いの一劃に彼らの居住区がある。)

島外への流出が、人々の環境知識をどんなに喪失させることになつたか。彼らの多くは、もはや故郷の島で生存をはかるすべを失ってしまった。今日、オセアニア各地の港湾都市には、こうして土地から切り離され、先祖伝來の社会から根こぎになつた人々が大量に生まれつづっている。

サンゴ礁の多様な生物についての詳しい知識、生態系の動態についての深い理解、それらの持続的な利用など、レンネル島民は二千年にわたって彼らの知識を蓄積してきた。それらの中には、まだ現代科学の理解がおよばない部分も少なくない。限定的な環境のもとで、自然と人間との均衡を維持してきた人々の知識の宝庫から、私たちは多くのことを学ばなければならないだろう。だが、そのための時間はすでに限られているのである。

(一九八四年八月稿)

註

(1) レンネルの伝統的な住居の型式について、われわれのもつ情報はけして充分ではない。方形で、真すぐな棟柱をもつ住居はポリネシアのほとんど全域と、ポリネシアの文化の影響をうけたところにみられる。また居住棟と炊舎を分離させる風習もポリネシアやミクロネシアでは一般的である。しかし、西ポリ

ネシアにみられる屋根を支えるための真束の利用はレンネルではみられない。また平面プランの妻側が半円形になる西ポリネシア型の住居もみられない。

西ポリネシアとの強い関係を示すものは墳墓である。マウンド状の墳墓は、トンガとウェアなどにおいて、セトウルメント・パターンの重要な要素をなしており、サンゴの板石でテラス状に囲む方法は、トンガの墳墓ランギ (langi) と全く共通している。

(2) 実際に親族関係をたどることができるリネージ (hano-hano) の最も古いマナハはとくに、ハカノホンガ (hakano-honga) と呼ばれ、そこには代々リネージの首長 (hakahua) が居住し彼らの墳墓がつくられた。一九三八年以前、全島にいぐつのハカノホンガがあつたかを知ることは困難であるが、現在の集落のうち、人々にハカノホンガと認められてるのは、次の一一集落である。

一、ニテニ (Niteni) 二、ヌクボサト (Nukuposa'a)

三、セゲナ (Segena) 四、カナバ (Kanaba) 五、テアバマグ (Teabamagu) 六、マタング (Matangi) 七、バイトウプ (Baitupu) 八、ルグ (Lughu) (以上西部レンネル) 九、ニウペル (Niupani-Baigau) 十、テバイトイ (Tebaitahe) 一一、テガノ (Tegano-Tesauma) (以上、東部レンネル)

(3) 一年の一定の時期に、カカイアンガやリネージの首長 (angiki, hakahua) は、マガマウベアのガグヨンガに集会し、儀式をおこなう。カイトウ氏族 (sa'a Kaitu'u) としての

共通の意識を確認する。この儀式の司祭者 (tunihenua) は常にテンガノのカカイアンガの首長がつとめる。のために彼が他のすべての首長に優越する最高首長とみなされる。こうした点を強調すれば、少くとも宗教儀礼的な側面においてカカイアノガの間に階層化がうかがえる。しかし、政治的、経済的な側面からみれば、それらのカカイアンガ集団はかなりの程度、自律性を保っていたように考えられるのである。たとえば、頻繁におこなわれたカカイアンガ間の戦争（多くの場合、農地の争奪を原因として起る）やカカイアンガの首長がもつ戦闘指揮権や、貢納をあつめる権限などについてそれを指摘することができる。（瀬良一九七九）このあたりに基本的な首長制社会の枠組に、かなりの程度変形を与えたレンネル社会の特徴を指摘することができる。それが、開発資源の分散的状況にもどうくだらうことは、充分に合理的な理解を与える。

(4) 火山島の場合では、島の中央部山頂から海岸に向って放射状の分割がみられる。ハワイのアフプア (ahupua'a) がその例である。

レンネルにおける土地所有の基本的な区劃は、このように島の中心を横断して、北岸から南岸にいたる細長い土地分割であったと考えられる＝(a)ダブル・パターン。しかし、長い間にわたる土地の継承は、次第に土地を細分化し、中央の道路を境界にして、北岸側と南岸側に分割するようになつた＝(b)シングル・パターン。このような土地所有のパターンは、リネージの分岐が進むにしたがつて増加する傾向がある。この場合

片方の海岸だけを利用することになるから、風上側か風下側のいづれか一方から、カヌーを操作しなければならなくなつて、海洋開発の機会はすつと減少する。つまり、このような土地所有形態の発生は、漁撈の重要性が減少し、農耕への依存が一段と強くなつたことを反映している。

こうして、所有地の細分化あるいは分断化は、人口圧が増大した時に、一層進展しただろう。今日、新たに分岐した集落のなかには、可耕地だけを所有し、海岸へでる道路も、森林域ももたない集落があらわれている＝(c)孤立パターン。

このような集落では漁撈のための海岸、海岸にいたる小径、森林資源などを、系譜をひとしくし、近接しているいくつかの集落が協同して利用する。

(5) ポリネシアの経済において海洋開発と農耕生産は統合されて不可分の関係をつくっているが、各地域の生態学的環境と人口学的変化は、生計戦略をとおして、その組み合せに多様な変異を与える。これはまた通時的にも変化すると考えられる。別稿において、筆者はレンネル島の環境収容量を約八〇〇人と算定し、農耕に比重をかけた、密度依存的な適応戦略がとられるようになつたのはA・D・八〇〇～一二〇〇年頃であることを考古学的調査の成果にもとづいて分析した。(近森一九八二-a)

(6) 現在、キャッサバの導入が、全く前車の轍を踏んで進行している。サツマイモに比べて、キャッサバは、より一層、地力を消耗させるように見受けられる。

(7) 航空写真(六四〇〇フィート一九七一年九月)から読みと

った土地利用状況と Segena, Kanaba, Lughu, Baigau の各カカイアンガ(現在の行政的単位としてのディストリクト)ごとに整理したものが以下の表である。

	Segena	Kanaba	Lughu	Baigau
集落	①～⑨	⑩～⑯	—	⑯～㉑
人口(人)	389	331	—	387
耕作地(ha)	74.1 a 54.6 b 12.5 c 7.0 d —	68.0 a 45.3 b 13.7 c 9.0 d —	5.1 a 5.1 b — c — d —	54.3 a 26.2 b — c 3.1 d 25.0
休閑地(ha)	129.3 a 57.6 b 71.7	144.7 a 56.4 b 88.3	11.4 a 7.1 b 4.3	71.6 a 31.6 b 40.0
ココヤシ(ha)	36.0	70.2	5.6	29.8
集落地(ha)	11.6	12.9	—	2.8
リーフ・フルット(ha)	241.2	315.9	161.0	247.7

(耕作地：a・新しい耕地，b・古い耕地 c・ココヤシの苗を植付けた耕地，d・タロの湿地栽培地 fusi 湖岸のみにみられる。
休閑地：a・若い休閑林 b・成育した休閑林)

これでみると休閑地の現耕作地に対する割合は、Segena が一・七四倍、Kanaba が一・一一倍、Lughu が二・二三倍、Baigau が一・三一倍(Baigau では湖岸の淡水湧水地周辺で

fusi ハサウエークローテ *coccoloba* の畠地栽培がおこなわれてゐる。これはおのれ程度、常煙化したり、焼烟耕作より安定してこなへるに見受けられる。ただし、これについては充分な調査をおこなつてゐないので、詳細については言及でやだ。）とたぬ。もし新たに可耕地が求められないとすれば、休閑期間の維持が極めて困難になつておかると考えられる。

(8) 太平洋戦争の時にテンガノ湖に一時米軍の水上機が飛来したことがある、カツオブシや米の入った木箱が海岸に漂着したことを記憶する島民がいる。しかし、生計生産の点からみれば島民の生活に影響を加へるものはなほなかつた。

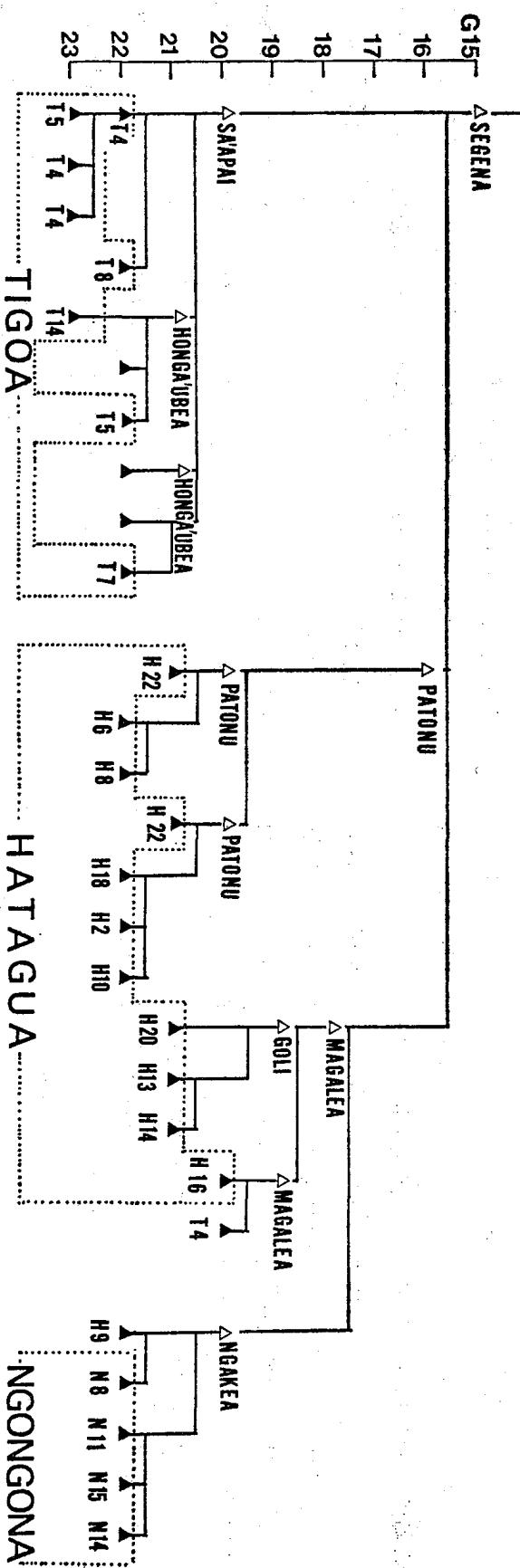


fig. 22. テイゴア、ハタグア、ゴゴナ部落の系譜的関係

(9) 集落の分裂は系譜原理どもおこなわれ傾向が強く。一九五〇年代に成立した Ngongona 部落の住民は Segena をハカノヘンガとする系譜関係によつて、西側に位置する Tigoa や Hatagua 部落と直接な関係をもつて、資源利用や、生産、社会活動を協同する。

Ngongona 部落に居住する構成員の通婚範囲をみると、Tigoa と Hatagua は夫方の田舎集落に含まれる。

(夫方の田舎集落) (妻方の田舎集落)

Hatagua —

Tetuakoi

Tigoa — Nukuposaa, Tehekatu'u,

Tenuginuku

Buisangebo — Tepuipui, Tepangega

Hagekumi — Buisangebo

Kaagua — Hanakaba

すなわち、Hatagua, Tigoa, Ngongona は同じ父系リネージュを構成する。妻の夫の出生集落を含まない。

リネージュ外婚制とでもいえる形式を見ることができる。

(fig. 22) 婚姻は交叉イット婚が一般的で、父方、母方を問わず

容認されている。夫婦は夫方の集落に新しい家屋を建て、両親が生存している場合は経済的に独立して生計を立てるとなる。(瀬良一九七九)

このようなことから資源利用や生産・社会活動における二集落間の相互作用の大きさを表現するとすれば、夫方系譜から分離した世代が下級するほど大きく、両集落間の人口数の積に比例し、距離に反比例する傾向によつてあらわすことができるかもしない。

[世代数] [人口の積]

[距離]

	年令	男性	女性	合計
	〇~四	八八	九三	一八一
	五~九	七七	八三	一六〇
	一〇~一四	七四	六四	一三八
	一五~一九	五五	五九	一一四
	二〇~二四	五一〇	五〇	九一
	二五~二九	三四〇	一七	三四
	三〇~三四	三〇	一三	四〇
	三五~三九	二四	一四	四八
	四〇~四四	三一	二七	五八
	四五~四九	三四	三四	六八
	五〇~五四	一二	二八	五〇
	五五~五九	一〇	一九	三九

fig. 1-d の集落番号「一、二、三、四、五、六」、「七、八、九」、「一〇、一一、一二」、「一四、一六、一七」、「一八、一九」、「二〇、二一、二二」の間にみられる協同関係は、上記の相互作用の大規模をよく示めしている。

(10) レンタルとグロナ島を含むたコアラの出荷は

一九七一年 一月一ノハ

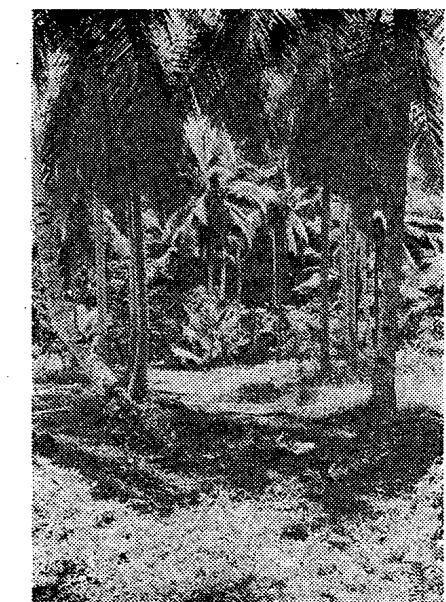
一九七一年 二月
一九七一年 七月
一九七一年 一六月 (政府資料による)

一九七一年 一月
一九七一年 七月
一九七一年 一月

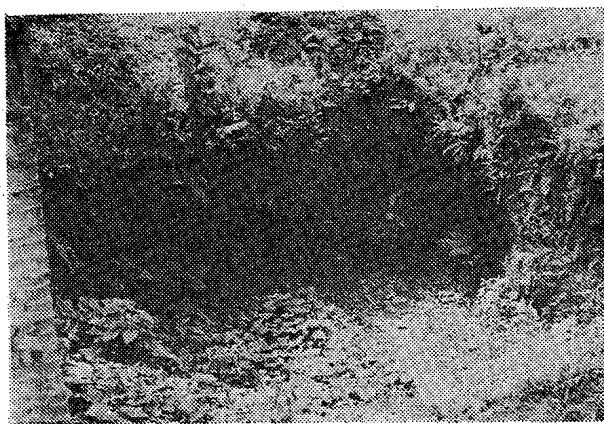
(11) 新しい土地への分村、土地の継承には伝統的な父系原理が厳格に保たれている。このような系譜関係に対する強調は、土地の制限が大きいことの反映であるかもしない。出自関係の生態学的関連について検討の余地がある。

(12) 一九七五年現在の全島住民の de facto 人口の年令別構成はつきの通りである。

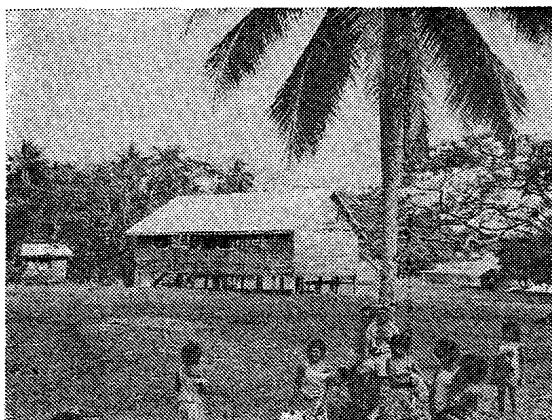
- 六〇～六九 九 八 一七
 七〇～七四 一 五 六 四
 七五～七九 一 一 三
 八〇+ 一 一 一
 Z・S・ 五 七
 金蔵 五四四 五七一 一一五
 ハチドリヌリ 一〇キルメートルの人口密度がわかるやう
 ら (fig. 20)
- 図**
- Buck, P. H. (1972) "Vikings of the Pacific" Chicago and London.
- 近森 由 (1982-a) 「スハネル島における文化適応の考古学的観
 慮」『釋・宋・繁・松本信弘先生追悼論文集』東京
- 近森 由 (1982-b) 「本腰地のなかの二つの古墳——ハネル島に
 やかね腰地古墳——」『史料』第51号
- 近森 由 (1985) 「海を渡ったヤシマヘヤーンハネル島の新
 つこ生螺——「東と西——前島信次先生追悼論文集」東京
- Deck, N. (1921) "Rennell Island" Geographical Journal 57. 474-76.
- Deck, N. (1945) "South from Guadalcanal: The Romance of Rennell Island" Toronto.
- Hogbin, I. (1931) "A Note on Rennell Island" Oceania 2. 174-8.
- Lambert, S. (1931) "Health Survey of Rennell and Bel-
 iona Island" Oceania 2. 136-173.
- 蠶貝画 (一九二六) 「ハロウハ羅貝ノタガレ人口レジトクノ
 ヒト」慶應義塾大学文部省民族・考古学研究会報 No. 4
- Stanley, G. A. V. (1929) "Report on the geological Recon-
 naissance of Rennell Island, British Solomon Islands
 Protectorate" Colonial Reports. Woodford, C. M. (1907) "Notes on Rennell Island" Man
 7. 33-37.



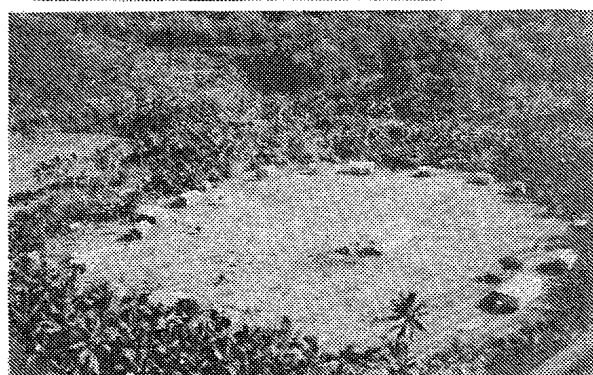
①



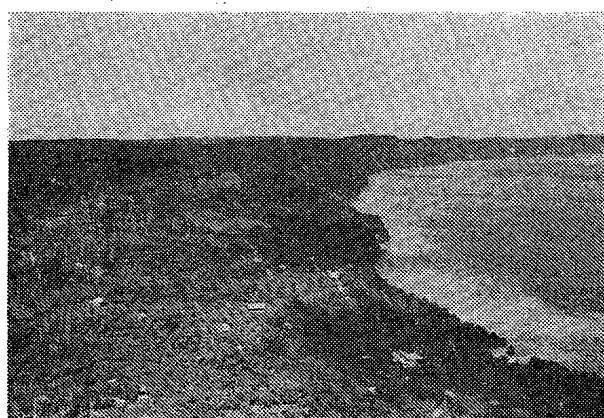
②



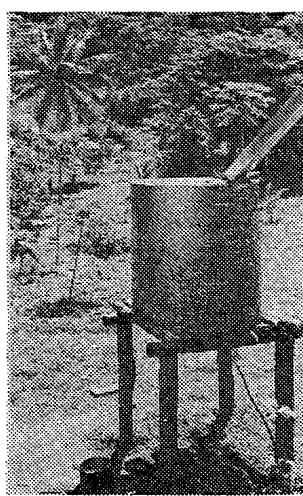
③



④



⑤



⑥

- pl. ① ヤシの木に囲まれた過去の家屋敷（マナハ）の跡
 ② ゴゴナ村の洞穴水
 ③ ニウパニ村の広場と教会
 ④ ゴゴナ村の円形集落
 ⑤ ラバング村の景観
 ⑥ 新設されたラバング村の給水タンク